流星のロックマン　時の果てのキズナ

Ｓ・Ｓ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン　時の果てのキズナ

【Ｎコード】
Ｎ９５４２Ｘ

【作者名】
Ｓ・Ｓ

【あらすじ】
スバルがメテオＧから地球を救ってから数ヶ月・・・
数か月の彼らの平和は転校生と謎の事件によって音を立てて崩れ去る・・・
新たな仲間達と共にスバルは敵に立ち向かってゆく。
そしてそこに２００年前の英雄が手を指しのべた！！
現在、〈孤独な鷲〉編執筆中！

プロローグ（前書き）

初めまして今回が初投稿です。
この小説はゲームとアニメを都合よくあわせています。
基本はゲーム設定ですがそういうのが苦手なかたはご遠慮ください。
それでは・・・スタート！！

プロローグ

とある場所

「おい！その話はたしかか！？」
銀髪にほほにムーの紋章をつけた少年がハンターＶＧにうつった少女に尋ねる

「間違いないわ。このアタシがＷＡＸＡのコンピューターにハッキングして手に入れた情報よ」
少女は少年に得意な顔で話す。
（ハッキングって…いいのかよ一歩間違えばヤバイぞ）
少年は心で少女にツッコミをいれながら微笑を浮かべる
（だがもうすぐ会えそうだな）
「じゃあ俺がその学校にいくよ」
「わかったじゃあちかいうちに連絡して」
そう言うと少女は通信を切った。

「いくぜサジタリウス、コダマ小へ」
『おう』
少年の言葉に黄色い体のせなかに弓と矢を背負った電波体が答える。

「もうすぐ会えそうだな…ソロ」

小年は暗い夜道を歩いていった。

プロローグ（後書き）

そんなに出来よくないんですが興味を持ってくれたら嬉しいです。

次回「プロローグ2」お楽しみに

プロローグ2（前書き）

今回は少しヤバイかもしれませんね。

プロローグ2

どこかの司令室

「諸君わしは、偉大なる先祖のあとを継ぎこの星を我が物にしてみせよう」

白髪まじりのマントを羽織った男が何人ものだんいんとヒールウィザード前で演説をする。

だんいん「しかしどうするのですＤｒ．バーグル様？」
バーグル「フンッ、これを見よ！」
バーグルが手を掲げるとモニターに小惑星が映し出される。

だんいん「これは？」

バーグル「これはかつてこの星を破壊しようとした小惑星じゃ
じつはこやつには電脳世界があってそこにはコントロール装置があるのじゃ
つまりこやつを手にすればこの星を支配するなど容易じゃわい
しかしこの計画はまだ途中、今しばらく準備がひつようなのじゃ」

そこまで言うとモニターが切り替わりＳ・Ｓロックマンが映し出される。

だＣ「ロックマン！！」

バ「さよう、こやつが今回の計画で目の上のタンコブになるであろうロックマンじゃ」

幹部「なるほどつまりわたし達がそのあいだこいつに邪魔されないようにしろというわけですね」

バーグル「うむ、　場合によっては殺してもかまわん」

バーグル「では各員呼び出すまでそれぞれの持ち場にもどれ！」

「「「ハッ！」」」

「フフフ　　ハーッハッハッハー！！」

司令室にはバーグルの笑い声が響いていた

プロローグ2（後書き）

バーグルのなまえはバグるをもじりました。
小惑星とバーグルの先祖エグゼやった人ならわかるかな？
次回「波乱の朝」感想まってマース。

波乱の朝（前書き）

スバル君とウォーロックが出ます。
ちなみにこの小説ネタ切れは少ないと思います。
ではドウゾ！

波乱の朝

コダマタウン　星河家
２Ｆ　スバルの部屋

「ｚｚｚ～」
『おい！起きろスバル』

ぐっすり寝ているスバルとそれを必死に起こす彼の相棒ウォーロック
彼らこそ世界の危機を何度も救った英雄シューティングスター・ロックマンである。

ロック『お～きぃ～ろぉ～！！！！』

スバル「ｚｚｚ…うにゃ？ロック？後５分・・・」

スバルが布団にもぐりこもうとするとウォーロックがハンターＶＧの時計を指す。

７・５５

スバル「・・・遅刻だぁ～～～～！なんでもっと早く起こしてくれなかったのさ！？」

スバルがウォーロックに聞くと

ロック『黙れ！バカヤロ俺はなてめーを３０分も起こし続けたんだ。
』
ウォーロックが怒って怒鳴る。
スバル「え、３０分！？」
ウォーロック『そうだよ！！』
スバル「うう・・・ごめん・・・」
ロック『へッわかりゃいいのよ』

その後スバルは大慌てでしたくし家を飛び出した
スバル「いってきまーす」
あかね「いってらっしゃい車に気をつけるのよ～」
スバル「わかってるって」
ちなみに委員長達はとっくにいったらしい。
スバル「今日から6年生なのに初日から遅刻したら委員長に何言われるかわかったもんじゃない。」
スバルは全力疾走しながらつぶやく
スバル「ねぇロック電波変換しちゃダメ？」
スバルがウォーロックに聞くと

ロック『んじゃあとでウィルス狩な』
スバル「はいはい」
ロック『じゃ、行くぜ！』

スバルはハンターＶＧを取り出す。
そして

トランスコード００３　Ｓ・Ｓロックマン

スバルは光に包まれる
そこには蒼き英雄ロックマンがいた。
ロックマン「よしいこう！」

ロックマンは光となってコダマ小へとんでいった。
そして正門前でウェーブアウトするとダッシュで教室に飛んでいった。

波乱の朝（後書き）

ちょっと切り方変でしたんね。
では次回予告です。
次回「再開と新たな出会い」

再開と新たな出会い（前書き）

今回いよいよ彼らが登場！

再開と新たな出会い

スバルは教室に駆け込んで自分の席に着く（ちなみに今年はクラス替えはなく学年だけ上がるのだ）

現在　８：１２　遅刻３分前だ。

スバル「ふぅ～　ギリギリセーフだ」

スバルが安易の息をつくと

「なにがセーフよ！スバル君あなた６年生の始業式から遅刻ギリギリで来るなんて

どういう神経してんのよ！」

「だからスバル君昨日メールで早く来るよう伝えてあげたじゃないですか」

スバル「いいんちょう、キザマロ」

そこにはお説教モードに入ったドリルのツインテールをした少女いいんちょうこと〈白金ルナ

とすこしうなだれているメガネのちび少年〈最小院キザマロ〉がいた。

委員長「だいたいあなたはねぇ…　　ガラッ（扉が開く音）

「おはよ～」

委員長がスバルに説教しようとするとそこに大柄で牛丼大好きな少

年〈牛島ゴン太〉が教室に入ってきた。
委員長「ゴ～ン～太～～～！！！」
ゴン太「ひぃッ委員長！」

委員長「まったくあなた達は、これじゃ今日から来る転校生にしめしがつかないわよ！」
委員長は半分怒り半分呆れながら言った。
「「転校生？」」
二人は首をかしげる
キザマロ「そうです僕のマロ辞典によりますと今日４人がこのクラスにくるらしいです。」
ペディア『ちなみに男女比は、３：１だよ』
キザマロの説明に彼のウィザードのペディアが付け加える。
スバル「へ～、そうなんだ」
ゴン太「どんなやつかな？」
委員長「とにかく転校生を学校になじませてあげることがわたしたち〈ルナルナ団〉の使命のなのよ！」
「「「・・・・・」」」

委員長が（一人で）気合を入れたその時
キーンコーンカーンコーン
チャイムが鳴った。

育田「せきつけー」
育田先生の声で全員が席に着く

育田「始業式前に転校生の紹介だ
卒業まで1年仲良くしてやってくれ」

ロック・オックス『『この電波は？…！まさか！』』
2体のウィザードなにかに気がつく。

トビラをあけ入ってきたのは

銀髪でほほにムーの紋章をつけドクロのTシャツにあおのジャケットを羽織り
青い瞳をしたかっぱつそうな少年

赤い髪にエメラルドグリーンの瞳ピンクのパーカーを着た
歌って踊れて戦える日本が誇るトップアイドルであり
スバル達の友達の女の子

緑の髪で一見女の子と見間違えてしまうほどの少年で
過去に親に捨てられ2重人格障害でヒカルを生み出してしまった
スバルの旧友の少年

黒髪で目つきが悪く黒っぽい服をきた
少し不良っぽいスバル達の友達の少年

「はじめまして　俺の名前はアルトだよろしくな」
「はじめましてかな？ベイサイドシティーから来ました。響ミソラです。よろしくね。」
「半年振りぐらいかな？みんな久しぶり双葉ツカサです。」
「このあいだは迷惑かけて悪かったジャックだ。　またよろしくな」
4人が自己紹介がすむとクラスがシーンとした
次の瞬間
「「「ミソラちゃーん！！！」」」
「ツカサお前どこいってたんだよ！」
「ジャック君おかえりー！」
「アルト君よろしくねー！」
みんなの声が一気にあがった。

ウォーロック『やっぱあのヤロウだったか』
スバル「ロックしってたの？」
ロック「まぁ周波数を感じたしな」
スバル「フーン」
育田「それでは席を・・・」
先生がいい終わらぬうちに
「ミソラちゃんは僕の隣に！」
「俺の隣に！」
「いえ、ぜひ僕の隣に！」
男子がミソラと隣になろうと必死でアピールした。（スバル・ツカサ・ジャック・アルト以外）

しかし、男子の期待はミソラの言葉によって無残にも崩れ去る

ミソラ「先生！、私スバル君の隣をきぼうします。」

育田「ん？そうかいいか星河？」

スバルにクラスの男子（ツカサ達以外）から「断れ」という視線が向けられた（とくに委員長）

スバル「い、いいですよ・・・（委員長まで…）」

その時クラスの殺気が強まった。

そんなことはおかまいなしにミソラはスバルに近づいて

ミソラ「ひさしぶりだね。よろしくねスバル君♪」

ミソラは、スバルにウインクした。

スバル「う、うん、こちらこそ」

スバルはなんとなく嫌な予感がしていた。

育田「それとゴールデンウィーク明けにも転校生が来るからな」

そのごツカサはスバルの通路をはさんだ左隣で隣は無し。

ジャックは委員長のまえでゴン太の右隣

アルトはロッカー側の列の最後尾で隣無し

となった。

再開と新たな出会い（後書き）

あ～疲れた。
ついに登場あの銀髪小年の名はアルト君です。
はたして彼は何者なのか。
次回「ツカサとヒカル」
お楽しみに

ツカサとヒカル

ホームルームが終わり15分の休み時間

スバルはミソラのことで質問責めにあっていた。

そのころ委員長たちは・・・

キザマロ「それにしてもジャック君とツカサ君が戻ってきてくれてうれしいです。」

ジャック「嗚呼、暁のヤローがおれとねーちゃんの保護者になってくれてな罪はＷＡＸＡで働くことを条件に何とかなったちなみにコーヴァスとヴァルゴは再構築された。」

そういうとコーヴァスがウィザード・オンした。

コーヴァス『いよぉ、ひさしぶりだな』

委員長「ひぃ、ジャック早くそいつひっこめなさい」

委員長はコーヴァスに怯える。

ゴン太「そういや委員長って獣型ウィザードにがてだっけ？」

ジャック「フ～ン」（黒い笑顔）

ジャックはコーヴァスをオフした。

ミソラ「そういえば暁さんとクインティアさんってつきあってるの？」

ミソラがここで爆弾発言

ジャック「聞いたら誤魔化すけど多分そうだな。」

その質問にジャックがズバッっと答えると

そこにスバルが質問地獄から生還した。

スバル「あ～疲れた、ミソラちゃんの人気はすさまじいよ。」

「「「おつかれ！！」」」

スバルはくたくただ。ちなみに男子はまだスバルに敵意を向けている。

委員長「ツカサ君あなた半年も休学してたけどなにしてたの？」

委員長の質問にツカサは落ち着いて話し出す・・・

ツカサ「僕はヒカルを封印するために各地を回っていたんだ。」

ナンスカ

ムーゆかりのこの地でツカサは自分のもう一人の人格ヒカルを封印しようときた。

（僕の心の弱さゆえにヒカルが生まれてしまいそしてＦＭ星人のジェミニによって地球侵略の片棒を担ぎそしてなかよくなれたスバル君を裏切りそして傷つけてしまった）

ツカサ「だからこの旅で弱いぼくを乗り越えるんだ！」

ツカサは広いナンスカの荒野で誓った。

そしてツカサは太陽があつく照るナンスカをあるきそして人気のない遺跡にやってきた
すると
ヒカル《ツカサ俺を出せ俺はもっと暴れてぇんだ！》

彼のなかのヒカルが暴れだした

ツカサ「ック！、　だめだヒカル、君の相手は僕だーーーーーーーーーーー！！！！」

ツカサ「電波変換　双葉ツカサ　オン・エア」

ツカサとヒカルがジェミニの残留電波で電波変換するとそこには白いボディのジェミニ・スパークWと
黒きボディをしたジェミニ・スパークBがいた

ジェミニ（ツカサ）「いくぞ、ヒカルお前を封印する。」
ジェミニ（ヒカル）《ヘッ、やれるモンならやって見やがれヒャハハハハハ！！！」

白と黒の双子がぶつかり合う。

数日後

二人の実力はまったくの互角、けっちゃくがつかず全力で戦い二人が同時に倒れるそれをただ毎日繰り返していた。

すると二人が戦いを始めようとすると空のムー大陸から4体の電波体が降ってきた。

「グハー！」
「ヌヌウウ！」
「キュオオオオオン！」
「キャキャ！」

ヒカル《なんだこいつら》

ツカサ「わからないだけどこいつら暴れてるこのままじゃ大変なことになる。
二人で倒そう。ヒカルいい？」

ヒカル《俺は暴れられればいいさ》

ツカサ「いくよ　電波変換　双葉ツカサ　オン・エア」

そこにはジェミニ・スパークがいた。

相手もやる気のようで戦闘体勢を取る。

「《ウェーブバトル　ライドオン！》」

ツカサとヒカル（後書き）

初バトルはツカサ君ですね。果たして彼はムーの電波体に打ち勝ちヒカルを封印できるのか。
次回「ツカサ＆ヒカルＶＳブラキオ＆ファントム＆イエティ＆コンドル」
ツカサ「いくよ、ヒカル！」
ヒカル《おうよ！》

ツカサ&ヒカルVSブラキオ&ファントム&イエティ&コンドル（前書き）

風邪ひいた・・・
なんか頭いてぇ
では初バトル
スタート！

ツカサ&ヒカルVSブラキオ&ファントム&イエティ&コンドル

ジェミニ（ヒカル）《いくぜぇ》
ジェミニ・スパークBが戦陣をきって駆け出す

ガキィン

ジェミニ（ヒカル）《がっ！！》
ジェミニ（ツカサ）「ヒカル！」
ジェミニ・スパークBがなにかに弾かれた
そこには赤くてどこか剣道の防具に似たムーの剣士〈エランド〉が
４体いた。

ジェミニ（ツカサ）「なんだこいつら」
ジェミニ（ヒカル）《気をつけなツカサこいつら普通の電波体じゃねえ》

二人が気づくと電波体たちがしゃべりだした。

ブラキオ『さようこいつらは我らの忠実な手下にして
電波変換の道具』

イエティ『グハーその名もエランドだ』

ファントム『さあ、エランドこっちに来るんだ』

ファントムの声にエランドたちが反応し彼らのもとにゆく。

コンドル『おぬしらのその態度どうやらムーの偉大さをしらぬよう

だな
ならばいまここでその身をもって知るが良い』

『『『『電波変換』』』』

ジェミニ（ヒカル）《なに！？》
ジェミニ（ツカサ）「こいつらも電波変換を…」

ジェミニ・スパークが驚いていると４体の電波体が現れた。

黒を基調とした金髪の怪紳士ファントム・ブラック

１０ｍもある古代の竜ブラキオサウルスに似たムーのスパイ、ブラキオ・ウェーブ

白っぽい体をしたヒマラヤにすむといわれる雪男のようなムーの戦士、イエティ・ブリザード

赤くて巨大な怪鳥のようなムーの監視者コンドル・ジオグラフ

コンドル『ムーの力を知れ「ミサイルバード」』
大量の鳥型のミサイルがジェミニ・スパークを襲う。

ジェミニ（ツカサ）「くっ！」
ジェミニ（ヒカル）《チィッ！》

二人は左右に別れかわす。

そしてそのままジェミニ・スパークBはコンドル・ジオグラフの左翼に攻撃を叩き込む。
ジェミニ（ヒカル）《おらぁぁ〈エレキソード〉》
コンドル『ぐうう、なかなかやるな・・・』
ジェミニ・スパークBは右手に形成したエレキソードで斬り裂いた。

しかし

ファントム『僕を忘れてもらっちゃあ困るな～』
ジェミニ・スパークBの後ろにファントム・ブラックが現れる
ファントム『ステッキソード！』

ファントム・ブラックが持っていたステッキでジェミニ・スパークBの背中を切り裂く

ズバッ

ヒカル《がぁっ》

ヒカルは斬られて地に落ちる背中から血が流れているが立ち上がった。

ファントム『キャキャッ、油断しているから背中がらあき～』
ファントム・ブラックは調子に乗って高らかに笑う
しかしジェミニ・スパークBはにやりと笑った
ジェミニ（ツカサ）「油断してるのはお前だ〈エレキソード〉』

ズドっ

ファントム『な・・・に・・・・・』

ジェミニ・スパークWはファントム・ブラックの背後からエレキソードで貫いた

ファントム『ば・・か・・・なぁ〜！！』

ファントムは叫びながらデータ分子となってデリートされた。

コンドル『なんと！』

ブラキオ『ファントムが・・・』

イエティ『グハー、一撃で・・・』

ジェミニ（ヒカル）《残念だったな俺は囮だ》

ジェミニ・スパークBがあざ笑うかのように言った

イエティ『グハー、ならばこれでもくらえ〈ビックスタンプ〉！』

イエティ・ブリザードは高くジャンプしてジェミニ・スパークWに襲いかかる

ジェミニ（ツカサ）「なにっ！？」

ジェミニ（ヒカル）『！！、あぶねえ、ツカサ！〈ロケットナック

ル〉！』

ドガァァァッ！

イエティ『ぐおおおお！！』

イエティ・ブリザードは空中でくらいふっとばされる。

ジェミニ（ツカサ）（！？、いまのいつもよりも強力だったような？）

ジェミニ（ヒカル）《ツカサぼさっとすんな！同時に行くぞ！》

考え事をしていたジェミニ・スパークWにジェミニ・スパークBはとどめをさすように言う

ジェミニ（ツカサ）「う、うん」

「《〈クロスエレキソード〉！！！》」

ジェミニ・スパークは体制をくずしていたイエティ・ブリザードを二人同時にエレキソードでクロスに斬り裂いた。

イエティ『がああああああああ！！！！』

イエティ・ブリザードはデータ分子となってデリートされた。

ジェミニ（ヒカル）《へっ、ざまぁみやがれ》

ジェミニ（ツカサ）（また、強くなっていたそれにあの時なんだか

まがまがしい力を感じた…
まさかヒカル僕らの親への憎しみを力に・・・
でもそんなことをしたら憎しみが消えたときヒカルが消えてしまう。
）

そう気づいたジェミニ・スパークWいや双葉ツカサは双葉ヒカルに
叫ぶ

ツカサ「ヒカル憎しみを力に変えるな！君が消えてしまう。」

ヒカル《！！…ツカサなんでわかった？》

ツカサ「君のことは小さいころからしっているからね。
それより答えてくれ。」

ヒカル《へっ、お前にこれ以上迷惑掛けたくねーからな・・・
最後ぐれーお前の役に立って終わらしてくれ。》

ツカサ「そんな…ヒカル」
ヒカルの告白を聞き自分にとってヒカルがとても大切な存在であっ
たことに気がつく。

ブラキオ『〈サンダーブレス〉！』

コンドル『〈ウイングレーザー〉！』
２つの光線が二人を襲う

ジェミニ（ツカサ）「うわあああああ！！」

ジェミニ（ヒカル）《がああああああ！！》
ブラキオ『別れはすんだか？』
コンドル『そろそろあの世に逝く時間だ』

ジェミニ（ツカサ）「くっ、ヒカルわかった君にそこまで言われたら断れない」
ジェミニ（ヒカル）《ツカサ・・・》
ジェミニ（ツカサ）「でも、きみにはやっぱり死んでほしくない。だからこれからもふたりで生きよう」
ジェミニ（ヒカル）《・・・ツカサとにかくあいつらをぶっとばすぜ！》
ジェミニ（ツカサ）「うん！」

ツカサの一言はヒカルにとってとてもおおきな言葉だった。
ブラキオ『死ね、〈ゲキリュウウエーブ〉！！』
コンドル『〈フライングインパクト〉！！』
きょだいな津波が二人を襲うそのすぐ後ろに隠れるようにコンドル・ジオグラフが突撃してきた

どうやら追い討ちをするつもりらしい。

ジェミニ・スパークW「いくよ、ヒカル」

ジェミニ・スパークB（おおよ）

「《ジェミニ…サンダーァァァ！！！！！》」

極太の電撃と超特大の津波がぶつかる。

ジェミニ（ヒカル）《（ちぃ、このままじゃ破れねぇ、だったら）》

ジェミニ（ツカサ）（！？、ヒカル！？まさか）

ジェミニ（ヒカル）《すまねえな、ツカサ・・・》

ジェミニ（ツカサ）「やめろ、ヒカルうううぅぅぅ！！！！！」

ヒカルは両親への憎しみをすべてジェミニサンダーにこめる。

ジェミニ（ヒカル）《おおおおおおおおおぉぉぉ！！！！》

ジェミニサンダーが津波を破りコンドル・ジオグラフとブラキオ・ウェーブを飲み込む。

ブラキオ『バ、バカなあああああああ！！！！』

コンドル『ムー大陸に栄光あれぇぇぇーー！！！！』

2体はデリートされた。

ジェミニ（ヒカル）《やったぜ！》

ジェミニ（ツカサ）「！！・・・ヒカル？」

ヒカルはじょじょに透けていった

ヒカル《へっ、どうやらおわりみてーだな。
ツカサ俺があいつらに全部ぶつけてやったおかげで
今のお前には復讐なんて思いはねーはずだ。》

ツカサ「ヒカル…そんな嫌だ消えないでくれ」

しかしツカサの思いとはうらはらにヒカルはどんどん薄れてゆく

ヒカル《ありがとな・・・ツカサ》

そしてヒカルは完全に消えた。

ツカサ&ヒカルVSブラキオ&ファントム&イエティ&コンドル（後書き）

今回は、ちょっと重い話になっちゃいましたね。
では少し頭がいたいのできょうはここまでです。
次回「ヒカルとのキズナ」

ヒカルとのキズナ

ヒカルが消えた瞬間、電波変換が解ける。

そしてツカサは、その場に崩れ落ちた。

ツカサ「ヒカルーーーー」

ツカサは大声で友の名を呼び泣き崩れていた。

自分にとってヒカルはかけがえのない親友だった。

苦しみ悲しみすべて分かち合ってきた。

ヒカルは自分勝手なところもあったがいつも自分の一番ちかくにいてくれた。

でももういない僕はまた一人だ。

ツカサは涙が枯れるほど泣きつずけた。

《たくっ、情けねぇつらしてんじゃねーよ。ツカサ》

ツカサ「えっ？」

スターキャリアーから聞き覚えのある声がしたこの１０年幾度となく聞いてきた声だ。

ツカサは自分のスターキャリアーをとると画面に映し出される自分そっくりな電波体を見た。

ツカサ「まさか・・・ヒカル？ヒカルなのかい？」

ヒカル『ああ、どうやらジェミニのヤローの残留電波の影響でこーなっちまったみてーだな』

ツカサ「よかった。本当によかった…」

ツカサは再び涙ぐむ。

ヒカル『そういや、俺がこーなった拍子にジェミニのヤロー、再構築されたみてーだぜ。』

ジェミニ『ツカサ、本当にすまなかった』

ツカサ「そうかジェミニまで…　もういいよジェミニ君がきたおかげでヒカルと和解するきっかけができたんだから。」

ジェミニ『そうか・・・ありがとう』

ツカサ「そのあと僕らはせかいを巡って修行してたんだ。」

ツカサがナンスカでの出来事を話し終えると皆はしばらく驚いていた

スバル「ツカサ君、そんなことがあったんだね。」

ミソラ「ツカサ君、ヒカル君良かったね。」

ジャック「お前らも苦労したんだな」

ルナ「すごいこと聞いちゃったわね」

キザマロ「ヒカル君と和解するとは」

各々がツカサ達のはなしの感想を述べる中ゴン太は話しを整理できず混乱していた。

ジェミニ『ちなみにだが電波変換もできるぜ。』
ヒカル『トランスコードは００６だ。』
ジェミニとヒカルがウィザードオンして話す。
ウォーロック『なに！？じゃあバトルを・・・
ツカサ「ちょっとスバル君来て。！」
ウォーロックの話をさえぎりツカサがスバルを呼ぶ。
スバル「え、う、うん。」
ツカサに手を引かれスバルは廊下へつれだされた。
スバル「どうしたの？ツカサ君」
ツカサ「スバル君今さらずうずうしいかもしれないけど、僕とブラザーバンド結んでくれないかな？」
ツカサがおそるおそる聞く。
スバル「そんなのこっちからお願いしてたんだしいいに決まってるよ。」
スバルは笑顔でこたえる。
ツカサ「ありがとう、スバル君」

二人はブラザーバンドを結んだ。

その時

ドッカーン

大きな音が響いた。

ヒカルとのキズナ（後書き）

次はウイルス戦です。
それにしてもツカサ君良かったですね。
スバル「それじゃ、次回予告するよ」
はいはい

次回「アルトの電波変換！？雷の狩人、サジタリウス・アロー」

スバル「次回もお楽しみに」

アルトの電波変換！？雷の狩人，サジタリウス・アロー（前書き）

アルト「いよいよ俺の出番がきたぜー！」
じゃあ舞い上がってるアルトはほっといて本編スタート！

アルト「おいっもう少し喋らせろ！」

気にするな。

アルトの電波変換！？雷の狩人，サジタリウス・アロー

ドッカーン！！！！！！

大きな爆発音がコダマ小に響き渡る。

「キャー！！」

「ウイルスだー！！」

スバル「何だ！？」

ウォーロック『ウイルスみてーだな』

スバルとツカサが窓の外をのぞくと、

窓の外には校舎をおおいつくすほどのウイルスがいた。

ミソラ「スバル君、ツカサ君早くしないとウイルスが暴れて大変なことになっちゃうよ」

ハープ『電波変換して戦うのよ。』

ミソラ達が廊下に出てきて叫ぶ。

スバル「よし、いくよ皆！」

トランスコード！！

スバル「００３、シューティングスター・ロックマン！！」

ミソラ「００４、ハープ・ノート！！」

ツカサ「００６、ジェミニ・スパーク！！」

ジャック「０１１、ジャック・コーヴァス！！」

ゴン太「００５、オックス・ファイア！！」

５人が電波変換する。

そして、外に出ると彼らは驚愕した、

ロックマン「そんな・・・」

ハープ（ミソラ）「なにこれ・・・」

オックス（ゴン太）「多すぎだぜ」

ジェミニ（ツカサ）「万は越してるかな？」

ジェミニ（ヒカル）『ありえねぇだろ・・・』

そこには数万のウイルスの大群がいた。

そこでジャック・コーヴァスがなにかを見つけた。

ジャック（ジャック）「！？、おい、あれを見ろ！」

ジャック・コーヴァスが指指すところには１体のヒールウィザードがエレキウィップをかまえていた。

ヒール『でてこいロックマン、ダークネットワーク（ＤＮＷ）によって造られたこのウイルス達でキサマを葬ってくれる。』

ヒールウィザードはウイルスに命令して学校を襲わせていた。

それを見ると、ロックマンはそいつのほうに飛んでいき叫ぶ。

ロックマン「やめろ、僕ならここだ」

ヒール『ん？でてきやがったなロックマン行け！ウイルス達よ！』

ヒールウィザードが、ウイルスたちをロックマンへけしかける。

ロックマン「ミソラちゃん、皆を誘導して非難させてそれまで僕らが抑えておくから」

ハープ（ミソラ）「わかったわ！」

ハープ・ノートが行こうとすると・・・

「その必要はねーよ」

不意にどこからか声が響く

ロックマン「だれだ！」

ジェミニ（ツカサ）「いったいドコから？」

ヒール『どこだ！、隠れてねーでててきやがれ！』

「屋上だよ。」

「「「「「『『え？』』」」」」」

全員が上を向くそこには銀髪の転校生のアルトが立っていた。

ロックマン「アルト君！？」

ジャック（ジャック）「何でお前がそこに？」

アルト「それはな・・・こーゆーわけさ、行くぜサジタリウス！！」

サジタリウス『おお！暴れてやるぜ！！』

トランスコード０１６
サジタリウス・アロー

ハープ（ミソラ）「嘘！？」

オックス（ゴン太）「アルトが」

ロックマン「電波変換しただって！」

皆が驚いてるとそこに一人の電波人間が現れた。

それは黄色と白を基調とし、薄みどりのバイザーで背中に矢と弓を
背負っていて両肩に
ムーの紋章がついている、銀髪はショートカットから肩までおりて

きていた。
みたイメージは狩人そのものだった。
ヒール『一人増えてもおなじことだ。かかれウイルス達よ。」
数万のウイルスがサジタリウス・アローに襲いかかる。
ロックマン「危ない逃げて！」
ロックマンが叫んだがサジタリウス・アローは逃げるどころか背中から矢を取り弓を引いた。
そして、
サジタリウス（アルト）「くらいな！〈サンダーアロー〉！！！」
ズダダダダダ
超連射の矢で攻撃した。
これによりウイルス軍団の3分の1減った。
サジタリウス（アルト）「つづきましては・・・」
するとサジタリウス・アローは高く飛び上がり弓を構える
そして残ったウイルス軍団に向かって矢を射る。
サジタリウス（アルト）〈レインアロー！！〉
ズダダダダダダッ、

大量の矢が雨の如くウイルスに降り注ぐ。

ヒール『（あんぐり）・・・・・・・・・・』

ロックマン「すごい！」

ハープ（ミソラ）「あれだけの数を1分足らずで倒すなんて。」

オックス（ゴン太）「アルトのやつ、カッコイイぜ！」

ジャック（ジャック）「あいつなにモンだ。」

ジェミニ（ヒカル）「すげぇぜ！」

ジェミニ（ツカサ）「アルト君、強いんだね。」

全員が感嘆の声を上げる

そして全てのウイルスがデリートされた。

ヒール『テメェ、よくもこれでも食らいやがれ〈エレキウィップ〉！！』

切れたヒールウィザードがサジタリウス・アローに襲い掛かる。

サジタリウス（アルト）「へっ、甘いんだよ〈ボルトアロー〉！」

サジタリウス・アローは、すさまじい電気を帯びたを射った。

ドスッ、バリバリバリィ
ボルトアローはヒールウィザードにつきささり、すさまじい電撃が
ヒールウィザードを襲う。

ヒール『あぎゃぁぁぁぁぁ！！！』

ヒールウィザードはデリートされた。

サジタリウス（アルト）「まっ、ざっとこんなもんよ」

ロックマン「アルト君、ありがとう
でも、君はいったい何者なんだい？」

サジタリウス（アルト）「そいつは、降りてから話すさ♪」

7人はウェーブアウトした。

アルトの電波変換！？雷の狩人，サジタリウス・アロー（後書き）

ついにオリジナルの電波人間を出せました。
次回はアルトの目的が明らかになる！
次回「ムーの末裔」

アルト「次回もよろしくな」

ムーの末裔（前書き）

話の進みがかなりスローであるときずいた今日このごろ・・・

ムーの末裔

スバル達は屋上にウェーブアウトした。

アルト「さて、何から聞きたい？」

スバル「じゃあ、アルト君、君はいったい何者なんだい？」

スバルが質問する。

ウォーロック『ついでにサジタリウスお前は何でここにいるんだ？』

それにウォーロックが質問を重ねた。

アルト「ＯＫ、まずは俺の自己紹介からだ。だがその前にスバルお前〈ソロ〉って奴知ってるだろ？」

スバル「え？う、うん知ってるけど。」

ミソラ「ソロってソロ君のことだよね？」

アルト「どうやら知ってるみたいだな。

なら話は早いや。」

少し間をおいて・・・

アルト「俺はソロの　幼馴染だ。」

「「「「「えええええぇぇぇぇぇーーー！！」」」」」

スバル「君がソロの幼馴染だってー！」

ミソラ「ソロ君、幼馴染いたんだ。・・・」

ゴン太「てことはアルトお前もムー人なのか？」

アルト「あったりー♪」
アルトはご機嫌に答えた。

ジャック「信じらんねぇ」

皆が驚いている中一人話についていけてないものが・・・

ツカサ「あのー、ソロ君って誰」　そうツカサだけソロとの面識がないのだ！

数秒の沈黙が流れる。

ミソラ「あのねツカサくんソロ君は、・・・・・・・・・って子なんだよ。」
ミソラが説明する。

ツカサ「なるほどスバル君のライバルかぁ～」

ヒカル『そいつ強いんだろ？たたかってみてーぜ』

ジェミニ『やめておけ、負けるのがおちだ。』

ヒカル『んだとこのお面ヤロー』

ヒカルとジェミニがけんかを始めたが無視していいだろう。

スバル「ところでサジタリウスはどうしてアルト君といるの？」

サジタリウス『俺か？、俺はいまをさかのぼること半年前、地球に遊びにきた俺は
ソロを探すため世界を回ってたアルトと意気投合してな。』

ミソラ「ちょっとまって！」

ミソラが口を挟む。

アルト「どうした？」

ミソラ「ソロ君を探してたってどういうこと？」

アルト「ああ、そのことか今話すよ。

実はソロとは5年間あってねーんだ。
6歳のとき俺らは両親を落盤事故で失ってな
ソロは町をでてっちまったんだ。
それから俺ともう一人の幼馴染〈ソプラ〉って女と世界を回ってソ

ロを探してたんだ。
ここに来たのもソロと接触したっていうやつがいるってきいたからさ。」

アルトの説明を全員黙って聞いていた。

最初に口を開いたのはスバルだった。

スバル「それならきっとここにソロは現れるよ。
ぼくの体の中にムーメタルっていうのがあって一定の周期で体に紋章がでるみたいなんだ。
きっともうすぐ紋章がでてソロが僕を倒しにくると思うよ。」

アルト「なるほどじゃああいつも呼んで気長に待ちますか。」

アルトが話し終わるとミソラがおやっという様に質問した。

ミソラ「けどソロ君自分が最後の生き残りだっていってたけど。」
そうソロは自分こそが最後のムーの血を引く者だといっていた。
しかしアルトの話だと、3人はいるということになる。

アルト「多分ソロのやつ俺とソプラをムー人と認めてないんだと思うぜ。」

ジャック「どうゆう意味だそりゃあ？」

アルト「あいつは孤高を貫くのがムー人の生き方だと考えててな、

キズナを大切にしてる俺らを認めてねーんだろうな。」

スバル「そうだったんだ。」

アルト「昔は、むじゃきでいい奴だったんだが・・・
お前らの話によると変わっちまったみてーだな。」

アルトがなつかしそうにつぶやく。

アルト「んじゃ、自己紹介もおわったことだし帰るか。」

ふと見ると夕陽が西に落ち始めていた。

そして6人は帰りじたくを始めた。

ムーの末裔（後書き）

やっと次回放課後だー
ここまで長かったー

それと明日サッカーの大会あるので多分更新できません。

ツカサ「それじゃあ次回予告するよ。
次回「スバルの災難！？」次回もお楽しみにね。」

1日に何話費やすんだかわからねえ。

スバルの災難！？（前書き）

今回は疲れてる事もあって短いです。

スバルの災難！？

スバル・ツカサ・ミソラが一緒に帰っていると…
3人は仲良く話しながら帰っていた

スバル「そういえばミソラちゃんの家ってベイサイドシティーでしょ、コダマタウンから遠くないの？」

ミソラ「あれっ、スバル君お母さんから聞いてないの？」

スバル「なにを？ロック何か聞いた？」

ウォーロック『いや、なにも聞いてねーぜ。
あっ、そういや昨日オフクロ嬉しそうだったぜ。』

ミソラ「2人とも知らないんだ。
実はね、ワタシ、今日からスバル君の家に居候させてもらいまーす♪。」

「『えええぇぇぇーーーーー！！』」

スバルとウォーロックは異口同音に声を上げた。

ツカサ「そうなんだ。仲良くねスバル君♪」

なぜかツカサはいつもどうりだった。・・・

ウォーロック『ちょっと待て、てことはハープとずっと一緒ってことか！？』

ハープ『ポロロン当たり前じゃないワタシはミソラのウィザードよ。』

ウォーロック『地獄だぁぁぁぁーーーーー！！』

ハープ『黙りなさい。この大バカ星人、バトルカード「ビックナックル」』

ウォーロック『ぐはぁっ！！』

巨大な（ハープの）パンチがウォーロックを襲う

ウォーロックは気絶した。

スバル「ちょっとごめんミソラちゃん、僕さき帰って母さんに事情聞いてくるね。」

スバルはダッシュで家に帰っていった。

ミソラ「あ、ちょっとスバル君！！」

ミソラはスバルを呼んだが聞こえず行ってしまった。

ツカサ「ミソラちゃんも大変だね。」

ミソラ「う～～スバル君のバカ～」

ミソラはほほを膨らましながら言う。どうやらもう少しスバルと話したかったようだ。

ツカサ「ハハッ、ミソラちゃん落ち着いて家でゆっくり話せばいいじゃん。」

ミソラ「うん。そうだね。」

ミソラは少し機嫌を直した。

ツカサ「そういえばミソラちゃんって、スバル君のこと好きなの？」

ツカサがミソラにとんでもない質問をした。

ミソラ「ふぇっ？！、な、なんでそんなことわかったの。／／／／／／／」

ミソラが突然の質問に顔を真っ赤にして動揺する。

ハープ『ミソラ、あなたそれじゃあスバル君のこと好きですってい
ってるようなものよ』

ハープがあきれて言う。

ツカサ「ふ～ん、やっぱりか。」

ミソラ「なんでツカサ君そんなことわかったの？／／／／／」

ミソラはまだ顔が赤い。

ツカサ「う～ん、なんとなく、かな？」

ミソラ「そんな～」

ツカサ「じゃあ僕の家そこの白いマンションだから。」

そういうとツカサは〈ダイヤ・スパーク〉と書かれた白い５階建てのマンションへ帰っていった。

スバル宅

スバルはあわてて帰ってきた。

そして母親を問詰める。

スバル「母さん！、うちにミソラちゃんが住むって聞いたけどなんで教えてくれなかったの！？」

アカネ「だってそのほうが面白いじゃない。」

アカネは、クスクスとスバルをからかうように笑う。

スバル「そんなぁ」

アカネ「そうそうミソラちゃんにはスバルの部屋で寝てもらうからよろしくね♪」

スバル「えええええぇぇぇェえーーーーー！！」

ガチャッ、

ミソラ「おじゃましまーす。」

その時ミソラが少し申し訳なさそうに入ってきた。

アカネ「ミソラ、あなたは今日からこの家の家族なんだから「おじゃまします」じゃなくて「ただいま」でしょ。」

ミソラ「あっ、は、はい　ただいま！」

ミソラは嬉しそうに言った。

アカネ「それから、家族なんだから敬語は禁止！それからわたしもミソラって呼ぶから
お母さんだと思ってよんで。分かった？」

少し間をおいて

ミソラ「分かった、お母さん！」

ミソラは嬉しそうにいった。

彼女が母親を失って1年以上いえなかった言葉が今やっといえたのだ
彼女の目に涙があるのをスバルは見逃さなかった。

スバル「ミソラちゃん良かったね。」

ミソラ「スバル君…うん！。」

アカネ「あ、そうそうミソラあなたはスバルの部屋でねてもらうからね　。」

ミソラ「本当!?、ヤッター♪」

スバル「仕方ないか・・・」

スバル（委員長にばれたら殺されるな・・・気をつけよう。）

スバルはその時堅く心にちかった

それがわずか1日でダメになるとは夢にも思わず。

ちなみにウォーロックはずっと気絶してました。（笑）

スバルの災難！？（後書き）

意外と長くなってしまった。
とりあえずできるだけペースアップしよう。・・・
スバル「この小説完結するか不安になってきたよ。

アルトの紹介（前書き）

タイトルのまんまですね。

アルトの紹介です。

アルトの紹介

名前・アルト

ムーの末裔でソロの幼馴染５年前落盤事故でソロ、ソプラと共に両親を亡くす。
電波を見ることができるが自力での電波変換は不可。
しかし体を電波にすることができる。しかし戦闘力は変わらない。
両親とソロと別れ心を閉ざすが旅先でキズナの大切さを知る。
無類のイタズラ好き。そして甘党。

ウィザード・サジタリウス

射手座のＦＭ星人
カラーは黄色
背中に弓と矢を背負っている。
もちろん足はない。

電波変換・サジタリウス・アロー
トランスコードＮＯ・０１６

必殺技

サンダーアロー

電気をまとった矢を超高速発射する。
連射力は最高だが、　威力はもっとも低い。

ボルトアロー

サンダーアローの５０倍ほどの電気をまとった矢を射る。
威力は高いが連射はできない。

レインアロー

高くジャンプして相手めがけて無属性の矢を乱射する。

ちなみにアルトはあと3体ウィザードをつれているが登場はもう少し先となる。

そしてアルトにはまだまだ秘密があったりします。

アルトの紹介（後書き）

アルト「これからの俺の活躍に期待しててくれよな！」

次回「スバルとミソラ」

スバルとミソラ

スバルとミソラは今スバルの部屋にいた。

そしてミソラはスバルの部屋をみまわっていた。

ミソラ「わぁ～、スバル君の部屋って本当に宇宙の物しかないんだね。」

スバル「あれ？ミソラちゃんって僕の部屋に来たことあったよね？（流星1参照）」

ミソラ「あの時はゆっくりできなかったしね。」

その後二人はしばらく楽しそうに話していた。

しばらくして

あかね「ミソラ～スバル～ご飯できたから降りてきなさーい。」

あかねの呼び声がかかった。

「「は～い」

スバル「行こうミソラちゃん。」

スバルが部屋を出ようとするとミソラが呼び止める。

ミソラ「あっ、待ってスバル君ご飯たべ終わったら展望台行かない？」

スバル「うんいいよ。今日は晴れてるから綺麗に見えると思うし。」

ウォーロック『またあそこに行くのかよ。退屈で仕方ないぜ。』

ハープ『黙れこのＫＹ星人め！』

ハープがウォーロックを殴って強制的にウィザードオフさせた。

スバル「…じゃあいこうか。」

ミソラ「うん。」

二人は下に降りていった。

その後大吾を交えて夕飯を食べてスバルとミソラはいま展望台に来ていた。

今二人は満天の星空を見上げていた。
スバルはいつもどうり展望台の手すりに寄りかかってミソラはスバルの後ろで眺めていた。

ふと、スバルが口を開いた。

スバル「そういえば僕らが初めてあったのってこの展望台だよね。」
ミソラ「そうだね。あの時わたしがだしたヘルプシグナルでスバル君が来てくれて。」
スバル「本当にあの時僕はミソラちゃんと逢ってなかったら今の僕はきっといないだろうな・・・」
ミソラ「わたしだってスバル君と逢ってなかったらきっと大好きな歌もやめてたと思う。」
ミソラ「だから今のわたしがあるのもスバル君に逢えたからなんだよ。」
その時ミソラはスバルに伝えると決意した。

自分の思いを
それがどんな結果になっても後悔しないと。

ミソラ「あ、あのね、スバル君、その、聞いてほしいことがあるんだけどいいかな？／／／／」

ミソラは顔を赤くして言う
スバルも振り向き真剣な顔になる。

スバル「どうしたの？、ミソラちゃん？」

ミソラ「わたしスバル君のことが好きです！、
その、わたしでよかったら付き合ってくれないかな？／／／／」

スバル「ええっ！！／／／／」

ミソラの顔は真っ赤だ。
そしてスバルも真っ赤である。

数秒の沈黙のあと

スバル「・・・僕も好きだよ、ミソラちゃんのこと、え～と僕でよかったらその、よろしくお願いしま

す／／／／／／」

そしてまた数秒の沈黙が流れた。
そしてスバルの返事を聞きミソラの顔がパアァァっと明るくなった。

ミソラ「スバル君！！／／／／／／」

ミソラは嬉しさのあまりスバルに飛びつく、そしてスバルは後ろに吹っ飛ぶ。

スバル「ミ、ミソラちゃ・・・／／／／　　ガンッ、

スバルの後頭部に鈍い痛みがはしるそしてスバルの意識が途絶えた。

ここでスバルとミソラの立ち位置を思い出してもらいたい。

スバルは展望台の手すりに背を向けてミソラの告白を聞いた
そして正面から飛びつかれ後ろに吹っ飛んだ。

ここまで話せばお分かりだろう

そう、スバルは手すりに後頭部をぶつけたのだ。

ミソラ「スバル君！？、スバル君大丈夫！？」

スバル「う、う～ん」

スバルは完全に気絶していた。

ミソラ「どうしよう、ハープ、ロック君
あ、あれ？二人ともどこ？」

ミソラが二人に助けを求めたがなぜかハンターＶＧから消えていた。

ミソラ「どうしようわたしのせいだ。・・・」

ミソラが落ち込むすると

「あれ？、ミソラちゃんどうしたの？　　あっ、スバル君！」

そこにはツカサがいた。

ミソラ「ツカサ君！、あのね、わたしがね嬉しくてね告白がねスバル君の抱きついて・・・」

ミソラがパニックになりながら説明する。

ツカサ「う～んよくわからないけどミソラちゃんがスバル君に告白してそれでＯＫもらえて嬉しさのあまり抱きついて

気絶させちゃったってこと？」

ミソラ「うん／／／／／」

ミソラがすこし顔を赤くしながら答える。

ジェミニ『そういうときは・・・こうだ！「電気ショック」』

バリバリッ、

スバル「うわ！！？」

スバルは電流に驚いてとびおきた。

スバル「あれ？ミソラちゃんにツカサ君？」

ミソラ「スバル君！」

ミソラがスバルに抱きついた。

スバル「ミソラちゃん！／／／／／／／」

ミソラ「よかった・・・ごめんねスバル君わたしのせいで・・・」

ミソラが泣きながら謝った。

スバル「ミソラちゃん、いいよ僕は大丈夫なんだから。」

そういうとスバルはミソラを優しく抱きしめた。

ツカサ「あのー、お取り込み中のところ悪いんだけどヒカルみなかった？」
ツカサが笑いをこらえながら聞いた。

「「ツ、ツカサ君／／／／／／／／」」

スバル「い、いや見なかったけど／／／／／」
ミソラ「ど、どこか行っちゃったの？／／／」
ツカサ「実はウォーロックと勝負するっていっちゃったんだ。」
ジェミニ『まったく、勝手な奴だ。』

ミソラ（それでロック君とハープどこか行っちゃったのか）
ミソラは一人納得していた。
ツカサ「じゃあね（明日が楽しみだな♪）」
ツカサはかえって行った。

その後スバルとミソラは手をつないで帰ったが
それを見た大吾とあかねに質問責めにされ付き合ってることを自白させられたことは言うまでもなかろう。

スバルとミソラ（後書き）

正直恋愛模写がかなり苦手だと気がつきました（苦笑）
アルト「こりゃからかいがいがありそうだぜ。」
なにいってんのアルトにもスバルと同じ状況になってもらうつもりだよ。

アルト「マジかよ・・・」

次回「いやそれマズくない？・・・」

お楽しみに

次回でやっと1日が終わる。

いやそれマズくない・・・

スバルの部屋

スバルとミソラは大吾とあかねにからかわれたあと自分の部屋にもどってきた。

で・・・

ミソラ「なんでダメなの？スバル君ワタシのこと嫌い？（涙目＋上目使い）（演技）」

スバル「だから嫌いとかの問題じゃなくてさすがに一緒に寝るのはちょっと／／／／」

ミソラがスバルに一緒寝ようと提案しスバルが全力で断わっているのだ。

そんなことが15分ほど続いていると・・

アカネ「スバル～ミソラ～お風呂はやくはいっちゃいなさ～い」

その時ミソラがあることをひらめいた。

ミソラ（ねぇハープ・・・ってどうかな？）

ハープ《いいじゃないやってみなさいよフフフ。》

ミソラ「ねぇ～スバル君一緒にお風呂入ろ♪」

スバル「ええええぇぇぇぇぇなにいっちゃってんのミソラちゃん／／／／／／／／」

スバルは顔が真っ赤である。

そりゃそうだろうあの響ミソラにこんなことを言われて赤くならない奴がおかしい。

ミソラ「じゃあ、毎日一緒に寝るか、お風呂入るかどっちにする。」

ハープ『ちなみに拒否権はないから。』

スバル「うう・・・わ、わかったよ一緒に寝ればいいんでしょ？」

スバルは観念したようにいった。

スバル１６分３８秒で撃沈。

で・・・

今はミソラが風呂に入ってスバルは部屋でウォーロックと話していた。

スバル「僕ってミソラちゃんによわいのかな？」

ウォーロック『お前ホント女ってやつによえーよな委員長といいミソラのやろーといい』

スバル「そうだねハハッ、」

スバル「あ、そうだ明日ＷＡ？Ａにいくからね。」

ウォーロック『ああ、今日のウイルス騒ぎか？』

スバル「うん、暁さんに報告しないとね、
それにあのヒールウィザードがいってた〈ダークネットワーク〉って言うのも気になるしね。」

その後スバルは布団に入って眠った。

その後ミソラが入ってきた。

ミソラ「あーいい湯だったぁ。」

ミソラ「あれ？スバル君？」

ミソラはスバルを探し布団をみた

そこには寝息を立てて眠るスバルが居た。

ミソラ「仕方ないなぁスバル君♪」

そういいながらミソラは布団に潜り込みスバルに抱きついた。

ミソラ「おやすみスバル君・・・スースー」

ハープ『あらら寝ちゃったスバル君ミソラあしたが楽しみね♪』

アルトの家（格安アパートの1室）

アルト「これでソプラにれんらく完了。あいつの性格だからな今週中には来るかもな
あいつソロのこと大好きだからな。」

？『ところでアルトよ星川スバルたちに我が主よりの伝言伝えたのか？』

アルト「・・・！しまったすっかり忘れてたぁぁぁ」

？2『地球に迫る危機を彼らに伝えるためお前に託したのだぞ。』

アルト「すまねぇ、明日ＷＡＸＡにいってつたえる
スバル達はサテラポリス遊撃隊に居るってきいたからな」

？3『なるほどしかし学校で言えばよいのではないか？』

アルト「それだと二度手間じゃん。」

サジタリウス『もういいや寝よう。』

そうして彼らは眠りについた。

いやそれマズくない・・・（後書き）

やっと1日終わったぜぇ

ツカサ「そういえば敵っていつくるの？」

あともうちょっとあるからなGW位かな？（小説内で）

ツカサ「あと3週間ちょっとか、ながいな」

そのうち絶対面白くするから、もうちょっとまって。

恐怖！？コダマの乱？（前書き）

今回はほぼギャグですね。

アルト「やってる時間あんのか？」

モーマンタイ♪

スバル「古くない？・・・・」

恐怖！？コダマの乱？

スバルの部屋

ＡＭ：７：３５

スバルは目を覚ました。

そして固まった。

そこには超どアップのミソラの寝顔があった。

スバル「わあああああぁぁぁぁ！」

そして気絶した。

その叫びでミソラが目を覚ました。

その後気絶しているスバルをなんとか起こしいまは朝食を食べている。

そして食べ終わる

ピンポーン

スバル宅の前

委員長「スバルく～ん今日も遅刻ギリギリなんて許せないからみんなで迎えに来てあげたわよ～」

そこにはルナ・ゴン太・キザマロ・アルト・ジャックがいた。

委員長「スバル君早くでて来なさい！」

委員長がもう一度インターホンを押そうとした・・・その時

「「いってきま～す！！」」

玄関のドアが勢いよくひらきスバルとミソラが飛び出してきた。

ドガッ、　ドン　「キャッ！」

委員長がドアにはじきとばされた。

しかしジャックたちが驚いていたのはスバルの家からミソラが出てきたことだった・・・（ツカサをのぞいて）

ジャック「なんで」

ゴン太「スバルの家から」

キザマロ「ミソラちゃんが」

アルト「出てくるんだ？（かなりあっさりと）」

スバル「いや、その、えっと・・・」

ミソラ「スバル君！わたしがスバル君の家に住むことになったことぐらいさっさと話しちゃえばいいじゃん。」

「「えええええぇェェーーー！！」

ジャック「ふーん」

アルト「へー」

ツカサ「そうなんだ。」

委員長「なんでよ理由を言いなさい３０字以内で述べなさい！！」

ドアにはじきとばされて怒り狂った委員長がスバルとミソラを問い

詰めた。

スバルはただただオドオドしていたがミソラが・・・

ミソラ「そんなのわたし達が付き合ってるからだよ♪」（バッチリ30字以内♪）

プチッ　　（委員長のなにかが切れる音）

委員長「なんですってーーーー！！スバル君どういうことよ！」

委員長が怒り狂う。

キザマロ「やばいです委員長が暴走しだしましたあああああぁぁアあーーー！！」

スバル「大変だ皆電波変換で逃げるよ！」

ゴン太「キザマロ掴まれ！」

キザマロ「は、はい！」

トランスコード！！6人は電波変換して学校へにげた。

委員長「待ちなさい！・・・きいいいいィィィィ覚えてなさいよあなたたち！！！」

委員長は学校へ全力疾走していった。

６－Ａ教室

スバルとミソラはクラスメート全員（ツカサたち以外）に質問ぜめにあっていた。

「スバル！なんでお前がミソラちゃんと付き合ってんだよ！」

「ミソラちゃん星川君と付き合えてうらやましいな～」

ゴン太「スバルとミソラちゃんじゃあお似合いとしかいいようがないぜ。」

キザマロ「スバル君ミソラちゃんのことちゃんと守ってあげてくださいよ」

ガラッ、　　・・・し～ん・・・

委員長が教室にはいってきた瞬間しずまりかえった

委員長「ス～バ～ル～ク～ンちょっとこっち来なさい・・・」

スバル「は、はい・・・」

スバルは恐怖で顔が引きつっていた。

アルト「い、委員長落ち着けスバルになにする気だ？」

アルトも顔を引きつらせながら言う。（だいたい予想できるだろ委員長の性格なら・・・

委員長「やつあたりよ♪」　（黒い笑顔）

委員長「アルト君あなたも来なさい。」

アルト「ひぃっ、いや・・・俺は・・・」

委員長「・・・来い・・・（怒）」

アルト「は、はい・・・」

アルトとスバルは拉致られた・・・

そして・・・・・・・・・・・・

「「ぎゃあああああああアアア嗚呼嗚呼ぁぁぁぁ！！」
悲鳴の二重奏が朝のコダマ小に響いたのだった・・・

その後アルトは用事でかこつけて早退しＷＡ？Ａにいった（無論、スバルたちは知らない。）

そしていまスバル達はＷＡＸＡに向かってコスモウェーブを渡っていた。
昨日の事件について話すためだ。

んで、
ＷＡ？Ａ・サテラポリス本部

スバル「・・・というわけなんです。」

暁「なるほどダークネットワーク・・・DNWか・・・」

ツカサ「なにかわかりますか？」

暁「・・・　　分からん！」

ズルッ、

全員ずっこけた

ミソラ「変な間おかないでくださいよ暁さん」

ジャック「暁テメェおちょくってんのか？」

ゴン太（腹へったなぁ～）

暁「そういやお前ら小惑星がこの地球に向かってるって話しってるか？」

「「「「「ええ、小惑星！？」」」」」

暁「まぁしらなくても仕方ないか俺らもさっき話きいて調べてみて初めて分かったんだからな。」

ウォーロック『ちょっとまて話し聞いたって誰にだよ』

アシッド『それは・・・』

アルト「俺だよ。」

アルトが階段をおりてきた

「「「「「「アルト（君）！！」」」」」」

ゴン太「お前学校サボってなにやってんだうらやましいぞ！」

その時アルト達は沈黙した。

恐怖！？コダマの乱？（後書き）

ゴン太最後まじでなに考えてんだよ。

ミソラ「書いたのあなたじゃん。」

うるさいな～

とりあえずこのあとバトルかくんで皆さんどうぞご覧ください。

ミソラ「スバル君が戦うの？」

ビンゴよくわかったね。

では次回予告いってみよー

ミソラ「はいはーい次回「ＡＭ３賢者の警告、アルトＶＳスバル！？」

ミソラ「次回もお楽しみにネ。」

ＡＭ３賢者の警告、スバルＶＳアルト！？（前書き）

今回はやや強引かもしれません。

ジャック「そこはこいつの未熟さとして暖かく見てくれ。」

うう、言い返せない・・・

ＡＭ３賢者の警告、スバルＶＳアルト！？

アルト「・・・とにかくだ。今地球は小惑星に審判されようとしているんだ！」

スバル「審判？」

スバルが聞きなれない単語に疑問を持つ。

アルト「ああ、実は地球に向かってくる小惑星はこの星が危険な存在かどうか審判を行うんだ。」

ミソラ「じゃあもしその審判で危険とみなされたらどうなるの？」

ミソラがおそるおそる聞いた。

アルト「・・・宇宙から消滅させられる。」

「「「「「そ、そんな！！！！！」」」」」

ジェミニ『まてよ・・・アルトお前そんな話誰から聞いたんだ？』

『『『それは我らが主君ＡＭ３賢者に仕えし３銃士だ！！！』』』

アルトのハンターから３体の獅子、天馬、竜の姿をしたウィザード

が出てきて叫んだ。

それを見てスバルが叫ぶ

スバル「ペガサス・マジック、レオ・キングダム、ドラゴン・スカイ！」

ウォーロック『なんでお前たちがここに！？』

アルト「いや違うこいつらはＡＭ３賢者の力を受け継ぎ彼らによって生み出された電波体」

アルト「その名も〈ガーディアン〉さ。」

『さようそして我はレオ・キングダム様に仕えしガーディアン〈レオ〉』

『我はペガサス・マジック様に仕えしガーディアン〈ペガサス〉』

『我はドラゴン・スカイ様に仕えしガーディアン〈ドラゴン〉』

アルト「こいつらはＡＭ３賢者が知った小惑星の存在を地球に知らせるために来たんだ。」

ペガサス『しかし来る途中アステロイドベルトと衝突してな

コスモウェーブで倒れていたところをアルトに救われたのだ』

ドラゴン『さらにアルトはわれら3銃士との周波数がとてもちかく全員と電波変換できるのだ』

スバル「てことはサジタリウスと合わせて４つも電波変換できるの！？」

レオ『そうなるな。』

ツカサ「ちょっとまってよ小惑星はこの星が危険な存在じゃないか審判するんだよね？」

アルト「そうだ」

ツカサ「じゃあそんなときにＤＮＷが活動してたら危険と判断されちゃうんじゃないの！？」

ツカサにしては珍しくすこし焦った口調で言う。

暁「そのとうりだ。」

スバル「そんな！」

暁「だからおれはその話をききいまここにいるメンバーで〈ＤＮＷぶっ潰し隊〉を結成しようと思う。」

その瞬間全員がしらけた・・・

暁「あれ？俺変なこと言ったか？」

スバル「いや思いつきはいいと思うんですけど・・・」

アルト「なんつーのかな」

ミソラ「ちょっと・・・」

クインティア「シドウあなたネーミングセンスなさすぎよ。」

クインティアがあきれたように言う。

暁「そんな・・・いいと思ったのに・・・」

アシッド『珍しくシドウがへこみましたね。』

スバル「ふつうに〈サテラポリス遊撃隊〉でいいんじゃないかな？」

ツカサ「だよね、ハハハ」

ジャック「暁のやつのなんかよりは１００倍ましだぜ。」

暁「そんな・・・我が義弟までもが・・・」

ジャック「だれが義弟だ！！」

そんなこんなでいまここに〈サテラポリス遊撃隊〉が再結成されたのであった。

ＷＡＸＡ電波変換用バトルフィールド

今スバルとアルトが向かい合わせに立っていた

え？なんでこうなったかって？

それは暁が

「スバルとアルトってどっちが強いんだ？」

っていったのではっきりさせようとこうなったのだ！

で、

スバル「いくよアルト君！」

アルト「負けねえからなスバル！」

ちなみにほかのみんなは別室にて観戦中。

トランスコード００３シューティングスター・ロックマン

トランスコード０１７ペガサス・スノー

ロックマン「ホントだ姿が違う」

ウォーロック『あれはペガサスか？』

そこには水色をベースにところどころ濃い青が使われ、
2枚の翼を持ち、背中に氷の剣を背負い、
むねにはペガサスのエンブレムがつき胸より少し上にムーの紋章をつけた
天使のような電波人間がいた。

ペガサス（アルト）「そうだ、この姿はひょうけつの天馬、ペガサス・スノーだ！！」

ペガサス（アルト）「いくぜスバル！」

ロックマン「うん、勝負だ！。」

ウェーブバトル・ライド・　・　・　オン！！

ＡＭ３賢者の警告、スバルＶＳアルト！？（後書き）

なんとアルトはトランスコードを４つ持ってます。

アルト「次回はいよいよ俺とスバルの対決だぜ！」

このバトルは４部構成になると思います。

アルト「じゃ、次回予告いくぜ次回「雪の魔術師！？ペガサス・スノー」

「「次回もよろしく！」」

雪の魔術師!?、ペガサス・スノー!（前書き）

スバルＶＳアルト

ウェーブバトル・ライド・オン

雪の魔術師!?、ペガサス・スノー!

ペガサス（アルト）「いくぜ！〈アイスエッジ〉！」

ペガサス・スノーは背中に背負っていた氷の剣を握り締め、ロックマンに飛び掛った。

ロックマン「！！・・・バトルカード〈ビックアックス〉！」

ガキィィン

ロックマンは、巨大なオノでアイスエッジを受け止めた。

ロックマン「おおおぉぉぉっ！！」

ペガサス（アルト）「！？、うわっ！！」

そして、ペガサス・スノーはビックアックスの威力で吹っ飛ばされる。

ロックマン「いまだ！バトルカード〈ファイアバズーカ〉！」

ロックマンは体制を崩しているペガサス・スノーめがけてファイアバズーカを放つ。

ペガサス（アルト）「やべぇ、〈スノーボール〉！」

即座に周りに雪球を造り出す。そして
ペガサス（アルト）「いけぇ！」
大量のスノーボールがつぶてのように飛んでいき、
ファイアバズーカを対殺した。

ロックマン「あの体制から防御した！」
ウォーロック『やるじゃねーか、アルトの奴！』
ペガサス（アルト）「よし、つづいていくぜ〈フロストミサイル〉」
3発の氷のかたまりがロックマンに飛んでくる。
ロックマン「バ、バトルカード〈ワイドウェーブ〉」
ロックマンが波を発射しフロストミサイルに当てる
ドオンッ、ドオンッ、
2つを壊したが1つがロックマンにむかう。
ロックマン「しまった、う、うわぁぁぁぁ！！！」
パリィィィン
ロックマンはフロストミサイルをくらいふっとばされた。

ウォーロック『大丈夫か？スバル！』

ロックマン「もちろん、さあ反撃するよ。」

そういいながらロックマンは立ち上がる。

ペガサス（アルト）「喰らえ、〈アイスエッジ〉」

再びペガサス・スノーはロックマンに斬りかかる。

しかし、

ロックマン「甘いよ、アルト君」

バシッ、

ペガサス（アルト）「な、なに！？」

ロックマンは素手でアイスエッジを掴んでいた。

ロックマン「喰らえ、バトルカード〈シラハドリ〉」

ズバッ、ズバッ、

ペガサス（アルト）「があ、ぐう、！！」

ペガサス・スノーはソードで２度切りつけられる。

するとペガサス・スノーはジャンプして距離をとった。

ペガサス（アルト）「なかなかやるじゃねーかスバルよし次はこいつだ！」

ロックマン「！？」

アルトは胸の前で手をあわせる。

ペガサス（アルト）「ウェーブチェンジ（周波数変換）！！」

トランスコード０１８　ドラゴン・リーフ！！

ペガサス・スノーが光につつまれる。

ウォーロック『周波数がかわっただと』

ロックマン「電波変換を自由自在にコントロールしてるのか！？」

光が消えるとそこには

グリーンドラゴンの両腕につたをまきつけ

指先にはするどいかぎづめをもち巨大な尻尾をもち

背中にちいさな翼を持ちその左翼にはムーの紋章が刻まれた

竜戦士という印象を受ける電波人間がいた。

「この姿はドラゴン・リーフだ！」

ドラゴン（アルト）「さあ2回戦開始だぜ。」

雪の魔術師!?、ペガサス・スノー!（後書き）

次はドラゴン・リーフ戦ですね。

アルト「さすがスバル、世界を救った英雄なだけあるな。」

スバル「アルト君メチャクチャ強いよ。」

スバルく～ん弱気になっちゃいけませんぜ。

アルト「じゃあ次回予告いってみよー」

スバル「今回は僕がやるよ次回「深緑の竜戦士!?、ドラゴン・リーフ!」

ちなみにウェーブチェンジとは自分の今の電波変換に
別の電波変換を上書きすることです。

これによりアルトは４つの電波変換が
状況に合わせ使い分けられるのだ!!

深緑の竜戦士!?、ドラゴン・リーフ!（前書き）

一方別室　観戦チーム

暁「スバルもアルトも強えーな。」

アシッド『このままではエースの座を奪われますよ。』

暁「なにーー！それはいかん、よしアシッド今すぐ特訓だ！」

ヨイリー「だめよ。シドウちゃんいくらアシッドちゃんが改良されたからってあなたの今の体では無理よ。せめてあと2ヶ月は電波変換禁止よ。」

暁「そんな・・・（凹）」

ミソラ「スバルく～ん頑張って～！」

ツカサ「・・・！、見て、アルト君が動くよ！」

結構盛り上がっていた。

深緑の竜戦士!?、ドラゴン・リーフ!

「この姿はドラゴン・リーフ背中の翼で空もとべるぜ!」

ウォーロック『スバル気をつけろ。さっきと周波数が変わった。』

ロックマン「わかってる。けどこうして距離をとっていれば対応がしやすい。」

今ロックマンとドラゴン・リーフとの間はざっと２０メートル離れていた。

この距離ならきっと対処できる。

ロックマンはそう思ったしかし、

ドラゴン（アルト）「スバル!こないんならこっちからいくぜ!!〈リーフトルネード〉」

ギュオオオオォォォォン

ロックマンを取り囲むように４方に葉をまとった竜巻が４つ出現した。

そして中央のロックマンにめがけて猛スピードでつき進んできた。

これでは距離なんて関係ない。

ウォーロック『逃げろスバル。』

ウォーロックが叫んだしかし、

ロックマン「だめだ、逃げ道がない、くっ、わあああぁぁぁぁぁぁ！！」

ロックマンは中央で衝突し巨大な竜巻となったリーフトルネードに飲み込まれた。

ドラゴン（アルト）「今だ！〈リーフランス〉！」

ドラゴン・リーフの両腕のつたがのび竜巻で身動きのとれないロックマンを襲う。

ビシッ、ドスッ、バシッ、

ロックマン「くっ、」

ロックマン（なんとか脱出しなきゃ、・・・そうだ！あれなら！）
ロックマンはなにか思いついたように笑みをうかべた。
そして数枚のバトルカードを読み込み叫ぶ。

ロックマン「バトルカード〈ハリケーンダンス・トルネードダンス・タイフーンダンス〉」
ロックマン「ギャラクシーアドバンス〈サイクロンワルツ〉！」

ロックマンは竜巻の中心部で逆回転を始めた。
すると風同士がぶつかり合い帳消しにされ竜巻が消えた。

ドラゴン（アルト）「おいおいまじかよすげーなスバル、でも俺も負けるつもりは・・・ねぇ！〈リーフブーメラン〉！！」
ドラゴン・リーフは葉っぱがたのブーメランを取り出すと投げた。
しかしそれはロックマンとは違う方向にとんでいった。

ウォーロック『へへっ、どこ投げてんだよ俺らはここだぜ。』
ウォーロックが挑発するように言うと。

ドラゴン・リーフは薄く笑う。

ロックマンはドラゴン・リーフの表情の変化にきずいた、

ギュルルルルル

ロックマン「!、ブーメラン!!・・・まさか・・・

ロックマンが後ろを振り返った瞬間リーフブーメランがロックマンめがけて飛んできた。

ロックマン「うわあっ、ロックバスター!」

何とかロックバスターで起動をそらしかわした。

しかし

ドラゴン（アルト）「敵に背中向けたら・・・こうなるぜ〈ウッディブレード〉!」

ロックマンが声で振り返るとそこにはドラゴン・リーフがつたが巻きついた剣を構えていてそして・・・

ズバッ、

ロックマン「ぐああっ、」

ロックマンを斬りつけた。

しかし

ロックマン「まだだバトルカード〈ソードファイター〉」

すぐさまバトルカードを使用しすばやい太刀筋でドラゴン・リーフに反撃を仕掛けた。

ドラゴン（アルト）「なに!?、うわあああぁぁぁぁぁぁぁ!!」

不意の反撃にドラゴン・リーフは全て喰らってしまった。

そして吹っ飛ばされる。

ドラゴン（アルト）「いてて、やっぱドラゴンは接近戦苦手だな。」
するとすぐに立ち上がる。

ロックマン「あれをまともに喰らったのに・・・！」

ウォーロック『なんてタフなヤローだ（スバルといい勝負だぜ・・・）」

ドラゴン（アルト）「やっぱ接近戦はこいつだな！」

すると再び手を胸の前に合わせる。

ドラゴン（アルト）「ウェーブチェンジ（周波数変換）！！」

トランスコード０１９　　レオ・ボルケーノ

そこには、ファイア・レオとグレイガビーストをあわせたような姿をした、赤とオレンジを基調とし、
鋭いつめ、胸にはレオのエンブレム背中にはムーの紋章が刻まれた獣人とでもいうにふさわしい獅子のような電波人間がいた。

「この姿は・・・レオ・ボルケーノ！！」

深緑の竜戦士!?、ドラゴン・リーフ！（後書き）

ついに４種類めのアルトの電波変換が明らかとなりました。

そして（多分）次回でスバルＶＳアルト決着です。

ソプラ「次回の予告はもうすぐ出番のこのソプラに任せなさい！」

おい、まだちゃんと紹介してねーぞ。

ソプラ「モーマンタイ、モーマンタイ♪」

しかたねー奴だな。もうかってにやれ！

ソプラ「いわれなくともやるって、それじゃあ次回いってみよーう♪

次回「紅蓮の獅子!?、レオ・ボルケーノ!!、決着スバルＶＳアルト」」

紅蓮の獅子!?、レオ・ボルケーノ!!、決着スバルVSアルト

レオ（アルト）「さあスバル!、ファイナルラウンドといこうぜ!」

ロックマン「うん、負けないよアルト君!」

そのときレオ・ボルケーノがすさまじいスピードで走り出した。

レオ（アルト）「おおお、〈ボルケーノクロー〉!!」

ロックマンの懐に入り込み炎をまとったつめで切り裂こうとする。

ロックマン「っく、バトルカード〈ファイアスラッシュ〉!」

ガキイィィィン

剣と爪がぶつかる音が響きわたる。

ロックマンはすんでのところでレオ・ボルケーノの攻撃剣で受け止める。

レオ（アルト）「やるじゃねーか。だがパワーじゃこっち上だ!、おらぁっ、」

レオ・ボルケーノが爪を振るうとロックマンはあっさりと吹き飛ば

された。

ウォーロック『おい！、さっきのパワーとは比べもんになんねーぞ！』

ロックマン「くっ、それにスピードも上がってる。まさに接近戦向きだね。」

そういいながらロックマンはよろよろと立ち上がる。

どうやらいままでの試合の疲れがでているようだ。

レオ（アルト）「それだけじゃないぜ。追撃ようにこんなこともできるんだ。」

そういいながらレオ・ボルケーノの右腕がキャノンのようなものにかわった。

そしてよろよろのロックマン目がけて・・・

レオ（アルト）「〈マグマボール〉！」

炎の玉が発射された

ズドーン！

ロックマンのいた場所は炎に包まれる。

レオ（アルト）「やったか！？」

レオ・ボルケーノが確認しようとすると・・・

突然彼の視界にロックマンが現れる。

そしてワイドソードで攻撃してきた。

レオ（アルト）「チィッ、なぜ！？」

そういいながら後ろにとんで逃げるしかし・・・

ロックマン「バトルカード〈ワイドウェーブ〉！」

追撃のバトルカードが放たれた。　　フラッ、

レオ（アルト）「ぐわっ、！！」

レオ・ボルケーノにそのまま直撃する。

バタッ、

レオ（アルト）「はぁ、はぁどうやってお前マグマボールをよけたんだ？」

レオ・ボルケーノが肩で息をしながら尋ねる。どうやら彼もダメージが溜まっていたようだ。

ロックマン「ハァ、ハァ、ふふあれを見なよ。」

ロックマンが指差すさきにはマグマボールで黒こげとなったタヌキの人形があった。

レオ（アルト）「・・・ッフ、〈ヘンゲノジュツ〉ってことか・・・」

ロックマン「正解。かなりギリギリだったけどね。」

レオ（アルト）「それはそうとスバルおまえ立てるか？」

ロックマン「ムリ・・・かな？・・・」

レオ（アルト）「俺もだ、ハハハッ、」

今、彼らは仰向けに倒れたまま話していた。

ちなみにロックマンはワイドウェーブをうった直後ふらつきレオ・ボルケーノと同時に倒れた。

レオ（アルト）「じゃあこの勝負引き分けだな。」

ロックマン「だね。」

そこまでいうと二人の電波変換が解けるそしてそのまま疲労によってそしてそのまま眠った。

数時間後

スバル宅2階スバルの部屋

スバルは自分の布団で目覚める。

スバル「あれ?、ここは?」

その直後ミソラとハープが部屋に入ってくる。

ミソラ「起きたんだねスバル君、ここスバル君の部屋だよ。」

スバル「ミソラちゃん!、あれ?僕たしかWA?Aにいたはずだけど。」

ウォーロック『やっと起きたみてーだな。』

ウォーロック『お前らが倒れちまうからアルトと一緒におれが担いできたんだぜ。』

ハープ『なに偉そうにいってるのよサジタリウスに手伝わせてたくせに。』

スバル「ロックそんなことしたの！？」

ウォーロック『誤解すんな！ジャンケンできめたんだよ。』

ミソラ「けどロック君かなりめんどくさそうだったよ。」

ウォーロック『うるせぇっ、それよりお前らなにしにきたんだよ！』

ミソラ「そうそう忘れるところだった。」

ミソラ「スバル君夕飯できたから呼んできてってお母さん言ってたよ。」

スバル「うん、わかったよ。」

ミソラ「あ、そうそうそれから学校から連絡網回ってきて明日転校生くるってさ。」

スバル「あれ？じゃあなんで昨日こなかったのかな？」

ハープ『なんでも、急に決まったみたいよ。』

ミソラ「さぁ、下で夕飯たべよ♪」

スバル「そうだね、いこうか」

二人は1階に下りていった。

紅蓮の獅子!?、レオ・ボルケーノ!!、決着スバルVSアルト（後書き）

というわけでアルトVSスバル編完結ですね。

次回はいよいよ彼女が登場!?＋やっと新展開

次回「ハイテンションガール?ソプラ登場!」

ソプラ「やっと出番だー!!」

ハイテンションガール?、ソプラ登場（前書き）

アルトとの勝負から1夜あけて

今ここに新たな事件の風が吹く・・・

ハイテンションガール?、ソプラ登場

ＡＭ７：５０分

コダマ小通学路

現在いつものメンバーが通学していた・・・

スバル「そういえば今日転校生がくるんだよね?」

スバルが話題を提示する。

ツカサ「そういえば昨日メール来てたっけ?」

ルナ「どんな子が来るのかしら?」

アルト「・・・俺、知ってるぜ・・・」

アルトが疲れた表情で言った。

キザマロ「え?、アルト君知ってるんですか?」

ウォーロック『てか何だよお前の疲れようは!』

アルト「いや、そいつ俺の幼馴染でソプラってんだけど
昨日俺と同じアパートにきやがってほぼ徹夜で引越しのてつだいさせられた・・・」

ジャック「同情するぜ・・・」

スバル「お疲れ様・・・」

んで、ホームルーム

育田「えーと、今日は転校生がいるんだみんな仲良くしてやってくれ。
よし、入ってこい」

ガラッ、

教室に茶髪を肩まで伸ばして黄色いムー独特のイヤリングをつけ
赤い大きな瞳で
赤のラインが入ったミニスカート、黒のTシャツに茶色のジャケッ

トを羽織った少女が入ってきた。

育田「じゃあ自己紹介してくれ。」

ソプラ「はい！、え～初めまして世界のどこかからやってきた
みんなのアイドルソプｒ　「アホか！！」　キュルルルルル　ス
コーンッ　　はうっ！

アルトのなげた消しゴムがソプラのひたいをとらえた！

アルト「バカソプラ！、だれがアイドルだ、だれが
まず本物にあやまれ（呆れ）」

アルトが引越しされた怒り半分、呆れ半分でミソラを指差す。

ソプラ「なにいってんの？、こんなとこにアイドルなんかいるわけ・
・・」

ソプラはそういいながらアルトの指差す方向に目をやる。

すると・・・

ソプラ「いたあああああーーーーー！！！」

そう叫びながらミソラに駆け寄る。

ソプラ「うわああ、すごい本物のミソラちゃんだよねぇ？（目キラキラ）」

ミソラ「う、うんそうだよ、よろしく！」

ソプラ「あ、そうだワタシミソラちゃんのファンなんです！良ければサインください！」

そういいながらサインしきしをどこからか取り出してミソラにさしだす。

ミソラ「うん、いいよ♪　え～とソプラちゃんへでいいかな（サラサラサラ）・・・うんできた。」

ミソラはなれたてつきでサインを書く。

ソプラ「わーい、ありがとう。ミソラちゃん♪」

ミソラ「ううんいいよ別にそれよりこれからよろしくね、ソプラちゃん♪」

ソプラ「うんこちらこそ♪」

二人は握手をした。

スバル「ミソラちゃん仲良くなるのはやいね。」

スバルが口をはさんだ。

ソプラ「あれ？君は誰？」

スバル「ああ、ごめん僕は星河スバルだよ。」

ミソラ「えへへ、ちなみにワタシの彼氏で～す♪」

ソプラ「えええええェェェェェェェーーーーーーーー！！！！」

スバル「ちょ、ちょっとミソラちゃん／／／／／／／／／！」

スバルのかおが赤い、ちなみにミソラもほのかに赤い。

そんな騒ぎがおこるなか

育田「お～いそろそろホームルームに戻ってもいいか？」

「「「あ！」」」

ジャック「忘れてたな・・・」

アルト「はぁ～、トラブルメーカーは相変わらずか（呆れ）」

で・・・

昼休み

スバル「どうしたの委員長みんなをあつめて？」

ツカサ「なにか用？」

アルト「俺とソプラまで呼んで・・・」

ルナ「ふふふ、いいみんなあと3週間で・・・ゴールデンウィークよ！！！」

「「「「「「「！！」」」」」」」

ルナの言葉にみんなにせんりつが走る。

ルナ「と、いうわけでみんなで旅行に行きたいと思うんだけどいいかしら？」

「「「「「「「もちろん！！！」」」」」」」

ルナ「じゃあ今日の放課後私の家に集合ね。」

ハイテンションガール?、ソプラ登場（後書き）

ソプラ「出番きたあああああーーー！！！」

アルト「うるせえ！」　ゴンッ、

ソプラ「いったぁ～」

まさに幼馴染の漫才って感じだな（笑）

アルト「うるせえ！」

アルト「さっさと次回予告しろよ！」

じゃあ次回は・・・「ソプラの紹介」です。

アルト「いわゆるオリキャラ紹介ね・・・」

ビンゴ！

ソプラ「じゃあ次回もお楽しみに～」

（今回はアルトがずっと不機嫌ですいません、次の本編までに直させます。）

ソプラの紹介（前書き）

ソプラの紹介です。

ソプラの紹介

名前　ソプラ

解説

ムーの末裔でソロとアルトの幼馴染

幼いころ落盤事故で両親を失いソロがでていったため心を閉ざし旅にでるが旅の途中キズナの大切さを知りアルトと連絡しソロをさがすことにした。

ちなみに髪を染めているためムー人としての力（電波を乱す）が使えない。

しかし力が無くなったわけではなく髪を染めると力が封印される。

封印した理由は、銀髪が恐ろしく似合わなかったから・・・らしい。

ソロのことが大好き。

ちなみにコンピューターやプログラミングや暗号解析などのことに長けておりその実力はヨイリー博士以上！

若干トラブルメーカーなところ有り。

電波変換は不可。

ウィザード無し。

特徴、ムーのイヤリング、肩までの茶髪（染めてる）

赤い瞳

ソプラの紹介（後書き）

紹介が短い・・・

分からない点がありましたら感想にてお願いします。

次回「旅行！！」

旅行！！（前書き）

あと数回でふふふ・・・

スバル「S・Sがあやしい笑みを！？」

ヒカル『なにが起きるんだ！？』

アルト「いやな予感・・・」

アハハハハハいよいよ始まるのだーーー！

「『「怪しい・・・」』」

旅行！！

委員長の家

現在スバル達は委員長のへやでＧＷどこに行くか議論中

ゴン太「俺はアイちゃんに会いたいんだ！だからヤエバリゾートにいきたい！」

ルナ「だからそれは夏休みにみんなでいくっていってるじゃない！」

現在ゴン太以外の意見はまとまったがゴン太が一人猛反対した。

スバル「落ち着きなよゴン太、アイちゃんはＧＷのころは〈オーストラルア国際スキー大会〉に行ってるんだからどっちみちあえないよ。」

ゴン太「そんなぁ・・・」

ゴン太は力なくへたれこむ。

ルナ「それじゃあ決まったわね。」

ミソラ「ゴン太君夏休みにみんなで遊びにいこ？」

ゴン太「アイちゃん・・・」

アルト「それじゃあみんなＧＷはＹ県の観光地〈よかよか村〉に決定だ！」

「「「「「「「おおーー！！」」」」」」」

ゴン太「おおー・・・」

スバル「ゴン太元気ないね」

アルト「しゃーねーなゴン太！」

ゴン太「なんだよアルト」

アルト「これ見てみな」

アルトはそういいエアディスプレイに表示されたよかよか村の情報のうち一つを見せた。

それには

〈よかよか村名物！〉という大きなみだしで〈アニマルベビーカステラ〉とかかれていた。

ゴン太「おお！カステラだ！うほほーーうまそー食いてー！」

ゴン太のテンション急上昇

アルト「これでＯＫ♪」

ソプラ「そういえば旅費ってどうするの？」

ルナ「ぜんぶワタシのおごりだけど？」

ソプラの質問にルナがあっさりこたえた。

ソプラ「うそ・・・」

アルト「すげェ」

ミソラ「ねえ、ルナちゃん旅館どこにする？」

ミソラがハンターを持ちながらルナにたずねた。

ルナ「そうねえ、あ、これなんかどうかしら。旅館〈うらかわ〉２００年以上前からある老舗みたいよ。」

ディスプレイにはけっこう大きく歴史を感じさせる旅館が写っていた。

ミソラ「いいね、ここにしよ。」

３週間後

ウェーブランナー駅前

ＡＭ７：４５

ルナ「遅い、遅い、遅い、おそーーーーい、ゴン太あなたこれで何回目よ！！」

ゴン太「め、面目ねえ・・・」

オックス『ブロロなぜ俺まで・・・』

二人は遅刻しルナに大目玉をもらっていた。（土下座して・・・）

スバル「ゴン太っていつもああだよね・・・」

ツカサ「発車５分前ぎりぎりだったね。」

アルト「寝みー・・・」

サジタリウス『オックスのやつぺこぺこ謝ってらハハハハッ』

ウォーロック『ギャハハハハ、なっさけねー』

キザマロ「あ、委員長ウェーブライナーが来ましたよ！」

ルナ「わかったわ、みんな準備はいいわね・・・じゃあ乗るわよ。」

ルナたちはウェーブライナーにのりこんだ。

そしてウェーブライナーは、よかよか村へむかって走り出す。

これから彼らに待ち受ける運命の地へといざなうために・・・

旅行！！（後書き）

今回から旅行編スタートしました。

なんというかやっと物語が始まったという感じです。

ヒカル『次回予告は俺がしてやるぜ！

次回「動き出すストーリー！」楽しみにしてな！』

ちなみにこの旅行はアルトが主役です。

スバル「僕は？」

君はこのつぎだね。

動き出すストーリー！

よかやか村

旅館〈うらかわ〉

玄関

女将さん「ほんなら白金様お部屋は龍の間、亀の間、虎の間、火鳥の間、蝶の間の5部屋となります。」

ルナ「ありがとうございます」

そういうとルナはスバル達のほうへ振り返る。

ルナ「さあ、みんな荷物を部屋においたら表に集合よ！！」

「「「「「「「「「おおーーー！」」」」」」」」」

虎の間

スバル&ミソラ

スバル（ねえ、ロックなんでミソラちゃんと同じ部屋なの？）

ウォーロック《たしかさっき委員長とじゃんけんして勝ったとかいってたぜ》

スバル「・・・そう・・・」

ミソラ「スバル君何話してるの？」

ハープ『それより早くいくわよ』

うらかわの前

ルナ「それじゃあ行きましょうか。」

ジャック「けど、どこ行くんだ？」

ルナ「ふふそれは・・・モード！！」

ルナのハンターVGからモードが出てきた。

モード『はいはーい！、よかよか村のおすすめスポットは〈よかよか動物園〉です。

そこは東ニッポンでは最大といわれる超巨大動物園です！』

ルナ「わかった？それじゃあいくわよ！」

スバル達一行はよかよか動物園へやってきた
ちなみにここは昔、光熱斗とロックマン・エグゼに救われたことがある。

現在は改装され、動物の種類１０００種を越す巨大動物園となったのである。

入り口ゲート

係員「それじゃあ入場料お一人３００ゼニーで～す。」

すこしやる気のなさそうな男性がゲートにいた
ＧＷが始まり忙しくなってきているのだろう。

係員「ここは広いですから全て見るのも2日ぐらいかかりますよ。」

ミソラ「そうなんですか」

ツカサ「こんなに広いとデートにぴったりじゃないかな？・・・ふふっスバル君とのね♪」

ツカサはミソラにしか聞こえない声でささやいた。

ミソラ「ツ、ツカサ君／／／／／！」

そんなこんなで全員が入場した

そこは変な彫刻がある中央広場だった。

少し遠くに茶髪の少女がキリンを柵によりかかって見ていた。

その後ろには大きな木箱が山積みになっていた。

すこしぐらつき今にも倒れそうだが少女は気づかずキリンを見ていた。

アルトの視界にふとその少女と木箱が入った。

アルト（あの木箱、危ないなあいつ大丈夫かな？）

ルナ「それじゃあこれから各自自由に見学を・・・」

ドドドドドドッ、

突然大地が揺れだす。

スバル「!?、なに!これ!」

ミソラ「きゃあ!!、地震!」

ミソラはスバルに抱きつきスバルはミソラに抱きつかれたまましゃがみこむ

ほかの客やルナ達もしゃがみこむ

「きゃあああああ!!」

キリンをみていた少女の悲鳴が聞こえた。

スバルが声の方を見るとあのぐらぐらの木箱が少女めがけ、なだれのように倒れてきた。

そして動けないスバルを横切り、アルトが少女を助けに走った。

～アルト～

アルト「っく、間に合え！！」

俺はあいつを全力で助けに向かうもし間に合わなければ・・・そんなこと考えたくない。

しかし、俺の頭の中をあの落盤事故がフラッシュバックした。

あの時遠くはなれた丘で俺とソプラとソロの親が大きな音を立ててうなる崖崩れに

村長の家ごと飲み込まれたのを俺達はこの目で見ていた、

あの時俺達は何もできなかった・・・

そして俺達が泣きながら駆けつけたそこには・・・・・・・・・・・・・

父さん、母さん達が・・・・・・死んでいた。

そして、今あいつが崖崩れにまき込まれる父さん達に重なって見えたんだ。

そこまで思い出したところで俺はさらに加速した。

あいつを助けるために！！

～少女～

山積みにされていた木箱がわたしに降りかかってきた

その時悟った・・・わたしここで死ぬんだ・・・

そしてわたしに木箱がぶつかる直前

わたしは恐怖で目をつぶる、

次の瞬間わたしは、自分の体が浮くような感じを覚えた。

ドドーン

木箱が落ちる大きな音がすぐ近くで聞こえ目を開ける。

アルト「ふぅー、あぶねえ、あぶねえギリギリだったな。」

そこには銀髪の男の子が危機一髪という表情でいた。

（あれ？、わたし助かったの？この銀髪の子が助けてくれたの？なんでわたしなんかを・・・、そういえば足がさっきから地面についてないような・・・）

そしてわたしは、自分の状況を理解した。

～通常視点～

「あ、ありがとう／／／／／それでその／／／／」

アルト「おっ、無事だったか！」

「う、うんわたしは大丈夫だけどその／／／／」

アルト「え、・・・あああ！／／／／／／／／」

アルトは今少女をお姫様だっこしていた。

そしてあわてて降ろす。

アルト「い、いやこれはその、事故っていうか、お前を助けるために／／／／／／／／」

「べ、べつにいいよそ、そのありがとう／／／／／／」

二人とも顔が赤い。

スバル「お～いアルトく～ん大丈夫～」

中央広場からスバルたちが駆けて来た。
どうやら全員ぶじのようだ。

アルト「ああ心配すんな、危機一髪だったけど大丈夫だ！」

ツカサ「ケガがなくてよかったよ。」

ルナ「あなたも大丈夫だった？」

「うん、彼、アルトだっけ？が助けてくれたの。」

アルト「そういやお前名前は？」

「ワタシの名前は・・・ソラ、鷲尾ソラよ、よろしくね。アルト」

動き出すストーリー！（後書き）

というわけで、オリキャラ3人目鷲尾ソラちゃんが登場しました。

サジタリウス『そういやアルトのやつさっき顔赤かったな・・・まさか・・・ふふ、面白くなってきやがった。（にやり）』

では次回予告いってみよー！

サジタリウス『よっしゃ行くぜ！次回「デート！？、鷲座のささやき」だ！』

お楽しみに！

デート！？、鷲座のささやき！（前書き）

どこかの司令室

バーグルが、一人の男とウィザードに命令をしていた。

バーグル「〈監視者〉の報告によると星河スバル達はよかよか村に行ったそうじゃ。そこでおぬしらに騒ぎをおこしそのあいだにやつらを始末してもらいたい。」

？「了解いたしました。」

？『ガルルッ、ロックマン・・・・２００年前のやつと同じ名をもつものか・・・』

？「いくぞ・・・・」

？『承知した・・・・』

二人は司令室をあとにした。

デート！？、鷲座のささやき！

ソラ「わたしはソラ、鷲尾ソラよ。よろしくねアルト。」

アルト「おう、よろしくなソラ」

二人は自己紹介を終えるとスバル達の方を向く。

ソラ「ところであなた達は？」

ソラの質問にルナが答えた。

ルナ「はじめましてね、わたしは白金ルナよ。そしてこっちのでっかいのが牛島ゴン太、
ちっこいのが最小院キザマロ、緑めがねの子が星河スバル君、緑の髪の子が双葉ツカサ君、
この目つき悪いのがジャック、茶髪の子がソプラちゃん、この子はわかるわよね？」

そう区切ると、

ソラ「ミ、ミソラちゃん！！！」

ミソラ「初めまして、ソラちゃん♪」

ソラ「すごーい、アルトってミソラちゃんと友達なんだ！」

アルト「おう、（ちなみにだが、ミソラはスバルと付き合ってんだぜ。（笑）」

アルトは耳打ちするように言った。

ソラ「すっごーい！」

ソラがとつぜん大声を上げた。

スバル「ど、どうしたの？」

アルト「なんでもねーよ」

ルナ「ちなみにだけどわたし達は、全員コダマ小学校６－Ａ組なのよ。」

ルナがとって付けたように言う。

ソラ「ええ！？、コダマ小ってわたしがこのＧＷ明けに転校する学校よ！」

「「「「「「「「「「「「ええっ！！！」」」」」」」」」」」」

ツカサ「じゃあ、最後の転校生って鷲尾さんだったんだ。」

ルナ「それじゃあ、今からみんなでいくつかにグループ分けして、この動物園回らない？」

ルナが提案すると、

アルト「いいなその案。」

ソプラ「さんせ～い♪」

ジャック「ドリル女にしては珍しいいい案だな。」

ソラ「わたしもいいのかな？」

キザマロ「それじゃあくじ引きしましょう！」

スバル「いいよ・・・あれ？ゴン太は？」

ツカサ「さっきカステラ買いに行くっていっていっちゃったよ・・・」

みんな「「「「「「「・・・・・」」」」」」」

んで、くじ引きのけっか

Aチーム
ジャック・ルナ・キザマロ

Bチーム
ツカサ・ソプラ

Cチーム
スバル・ミソラ

Dチーム
アルト・ソラ

ルナ「それじゃあわたしたちは、大型動物のコーナーに行くわよ！」

「「はい・・・」」

テンションがガクッとさがったキザマロ達であった。

ツカサ「じゃあ、僕らは爬虫類のコーナーにでもいこうか？」

ツカサがマップをだしながら言うと・・・

ソプラ「ＯＫ♪」

二人は爬虫類コーナーへむかって歩きだした。

ミソラ（やったーーーーー！！、スバル君と一緒だーーーー！）

ハープ《よかったわねミソラ♪》

舞い上がっているミソラのよこでスバルが、

スバル「よし、ここからいこうかミソラちゃん・・・あれ？ミソラちゃん？」

スバルの言葉でミソラが我に帰った。

ミソラ「ハッ、スバル君！」

スバル「うん、じゃあ行く？」

ミソラ「うん♪」

二人は、うみの生き物コーナーに向かっていった。

アルト、ソラDペア

アルト「えっと、こことかどうかな？／／／／」

ソラ「い、いいんじゃないかな、ふれあいとかもあるみたいだし／／／」

二人の顔がほのかに赤い、まぁ、若い男女が二人っきりで動物園を回るなんてだれがどうみてもデートだろう。

そして二人はサル山、サルの島コーナーへ歩き出した。

〜アルト〜

（やばい、ソラと二人っきりで動物園ってどう考えてもデートじゃねーか！）／／／／

（とにかく早くサル山いってサル見よう、うん、そうしよう。）／／／／／

そうして俺は歩くペースを早めた。

〜ソラ〜

（アルトと二人っきりで動物園ってこれデートじゃん／／／／／／とにかく早くサル山にいってこのことを忘れよう。うんうん。／／／／／）

そしてわたしは歩くペースを早めた。

通常視点

アルトとソラがサル山につき柵からみた
するとそこは山というより谷という感じの場所だった。

二人がサル達を見下ろす。
だいたい６０匹のサルたちがところどころに設置された遊具であそんでいた.

アルト「おお！、サルがいっぱいいるぜ！」

ソラ「当たり前だよここはサル山なんだから、それにしてもいつもいっぱいいるなあ。」

ソラが懐かしそうにいう。

アルト「なんだお前、よく来てるのか？」

ソラ「うん、わたしの家は隣町なんだけどパパの出身がここでよくつれてきてもらったの。」

アルト「へぇ、いい親父さんだな。」

ソラ「うん・・・」

アルト「え!?・・・」

その時ソラの顔がくもった。そのへんかをアルトはしっかりとみていた。

アルト「ソラ、どうかしたのか?」

ソラ「・・・!!、な、なんでもないよ!!」

ソラは見抜かれ、あわてて隠そうとした。

アルト「・・・ほんとか・・・」

ソラ「うん・・・ちょっと疲れたからそこの広場で休も♪」

アルト「・・・ああ、わかった」

アルト(ソラの奴、なんか悩みでも背負ってんのか・・・)

動物園上空

？『ふふ、みーつけた♪
これであいつらには1年差をつけられたけど、ケフェウス様の命を果たせるわ♪』

わしのような鋭い爪、茶色っぽい羽毛のようなアーマーでこげ茶色の電波の体をした鳥のような電波体が言った。

休憩スペース

現在アルトが二人分のソフトクリームを買いに行っていて
ソラはアルトに「疲れてんならベンチでまっていろ」といわれまっていた。

ソラ「アルトまだかな・・・」

そしてふとあの事について考え出す・・・

ソラ「・・・それにしてもアルトなら、わたしのそばにいてくれる気がする。」

ソラ「でも、もしかしたらまたアルトもみんなと同じように・・・」

《そうよ、彼はきっとあなたを裏切るわ。》

ソラの頭にだれかの声が響く。

ソラ「だ、だれ！？」

ソラは立ち上がり叫ぶが誰もいない。

《わたしに会いたいのなら人気のないあなたのすぐ近くにある林に行きなさい。》

ソラ「・・・」

ソラは立ち上がると魔法にでもかかったように林へ歩いていった。

東の林

ソラは林の中央部までやってきた。

ソラ「どこにいるの？」

『ここよ』

突然ソラの目の前に鷲のような電波体が現れる。

ソラ「・・・！！」

『驚かないでわたしは〈イーグル〉あなたの味方よ。』

ソラ「わたしの・・・味方・・・・」

イーグル『そうよ、さあ、あなたに起きたことをわたしに話してちょうだい力になるわよ』

ソラ「じつは・・・・・・・・・・・・・・・というわけよ。」

イーグル『なるほど、大変だったわね。でも大丈夫あなたに力をあたえるわ』

ソラ「力・・・・」

イーグル『そうよ、さあ、ソラわたしを受けいれなさい。そうすればあなたの願いがかなうわ』

ソラ「・・・・わかったわ」

イーグルはニヤリと笑った。

そしてソラに取り付く。

イーグル『さあ、ソラ電波変換なさい。』

ソラ「・・・・電波変換、鷲尾ソラ・オン・エア！」

デート！？、鷲座のささやき！（後書き）

さて、数日間更新せずすいませんでした。

部活やらなんやらいそがしくて・・・

では、次回予告にいきたいと思います。

次回「ソラを救え！、悲劇のヒロイン、イーグル・フェザー！！」

ソラを救え！、悲劇のヒロイン、イーグル・フェザー！！

～アルト視点～

俺は今ソラと俺の分のソフトクリームを買うため店に来ていた。

店員「いらっしゃいませー！」

アルト「え～と、バニラ二つください。」

実は俺はけっこう甘いもの好きだったりする。

店員「かしこまりました。合計で２６０ゼニーとなります。」

アルト「は～い、え～と２６０ゼニーですね？」

そういいながら俺はハンターＶＧを操作する。

店員「はい、確かに受け取りました～」

そして俺は、ソフトクリームを受け取ってソラの待つベンチへ急いだ。

～通常視点～

ベンチ前

アルトはソフトクリームを両手に持ちソラに待ってるように言ったベンチについた。

しかし、ソラが見当たらない。

アルト「お～い、そら～、どこいったんだ～！」

アルト（なんだろう、すごくいやな予感がする・・・）

そして再び探し出した・・・その時！！

アルト「・・・！！おいサジタリウス！」

何かに気がつきサジタリウスを呼び出す。

サジタリウス『なんだよ、アルト？・・・こ、こいつは！？」

サジタリウスも何かに気がついたらしい。

アルト「お前も気がついたか、あっちの林のほうから変な電波が流れてやがる・・・」

サジタリウス『だが、気をつけろこいつは俺らと同じＦＭ星人独特の周波数だ！』

アルト（まさか、ソラも・・・）「とにかくいってみよう！」

アルトはソフトクリームをハンターＶＧに入れ、ソラとイーグルがいる東の林へ走っていった。

東の林中心部

中心部は濃い霧、濃霧に覆われていた。
そこは、本来ならば誰一人いない・・・はずだ。

ザッ、ザッ、

アルト「ここだな。」

サジタリウス『嗚呼・・・気をつけろ、何かの気配がする。』

そしてそのまま進もうとすると。

「やっぱり来たのね・・・アルト・・・」

後ろから声がした。

アルト「！！ッ、だ、だれだ！？」

アルトが振り返ると、そこには全身茶色の鷲の羽毛に包まれ、２枚の大きな翼を持って、鷲の頭のようなヘルメットで黄色のバイザーをつけ、その奥で暗い瞳を持っている。
さらに胸に、鷲座のシンボルマークをもった鳥人と呼ぶのがふさわしい電波人間がいた。

「わたしは、イーグル・フェザー…ＦＭ星人イーグルに力をもらった電波人間よ・・・」

アルト「…！、その声まさか・・・ソラ・・・・・？・・・・・」

アルトが嘘であってほしいという表情でたずねた。

イーグル（ソラ）「・・・そうだよ・・・・・・」

イーグル『そうよこの子はわたしを受け入れたの。』

イーグル・フェザーの横にイーグルが現れた。

アルト「ソラ！！、どうしてこんな奴のいうことなんかきくんだよ！？」

アルトが取り乱すように叫ぶ。

イーグル（ソラ）「アルトなんかにわたしの気持ちなんてわかんないよ！！！！！」

アルト「！！、ソラ！！！」

イーグル・フェザーは、アルトの声も聞かず、ウェーブロードに飛び乗った。

アルト「まてよっ！！、ソラ！！」

アルト「トランスコード０１６、サジタリウス・アロー！！！！！」

アルトも電波変換し、ソラのあとを追う。

旅館上空の電波

逃げるイーグル・フェザーに、サジタリウス・アローが追いついた。

サジタリウス（アルト）「ソラーーーー！、」

イーグル（ソラ）「アルト！、もうわたしはほっといて〈ナイフフェザー〉！」

イーグル・フェザーは、羽をナイフのように尖らせて4～5枚をおってくるサジタリウス・アローに投げた。

サジタリウス（アルト）「うおっ！！、くっ・・・」

ガキィィィィン、ガキィィィィン、ガキィィィィン

サジタリウス・アローは弓で3枚の羽をはじいた、しかし

ズバッッッ、ザシュッ、

サジタリウス（アルト）「うわあああああ！！！」

受けきれず2枚の羽で切り裂かれてしまう。

そして、サジタリウス・アローは大きな傷を負い、倒れてしまう。

イーグル（ソラ）「悪く思わないでね・・・」

そういい立ち去ろうとすると、

サジタリウス（アルト）「待て！まだ俺は終わっちゃいないぜ！！」

イーグル（ソラ）「！？、アルト！！」

イーグル・フェザーは、思わず振り返った。

そこには、横腹と左腕から血を流していてもたっているサジタリウス・アローがいた。

イーグル『しぶといわね。』（少しは楽しめるかしら？）

イーグル（ソラ）「もう、これ以上わたしにかかわらないで！〈フェザーストーム〉！！」

そう叫ぶと巨大な竜巻が横に巻き起こりナイフフェザーを大量に乗せてサジタリウス・アローを飲み込んだ。

サジタリウス（アルト）「がああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

風の刃と鋭い羽が、サジタリウス・アローを切り裂いた。

そして、風がやむ・・・

イーグル（ソラ）「これならたえられないよね・・・」

そういってサジタリウス・アローのほうを見た。

すると・・・

サジタリウス（アルト）「はぁ、はぁ、まだだ・・・」

そこには肩で息をしたサジタリウス・アローがいた。

イーグル（ソラ）「うそ・・・わたしの大技をたえたの・・・」

イーグル・フェザーは、目を丸くして驚いた。

イーグル『ふんっ、まだまだですって?、そんなのはったりよ!、ソラあの技で止めを刺しちゃいなさい!!』

イーグル（ソラ）「で、でも・・・」

イーグル『いいから！あなたはまた元にもどりたいの！？』

イーグル（ソラ）「うう・・・それはいや！」

その時イーグルには焦りの色があった。

サジタリウス（アルト）「・・・こいよ、ソラ」

するとイーグル・フェザーが飛び上がる。

イーグル（ソラ）「いくよ・・・」

そして大きく旋回すると2枚の大きな翼が銀色に輝く、
そしてサジタリウス・アローに向かって猛スピードで突撃していく。

イーグル（ソラ）「〈メタルウイング〉！！！」

鋼の翼がサジタリウス・アローを捕らえる。

サジタリウス（アルト）「・・・・・・・・・」

サジタリウス・アローは、かわしもせず目を瞑る。

ズバアアッッッ、

サジタリウス（アルト）「がっ、ぐうううう！！」

サジタリウス・アローは、もろに喰らい大きく吹き飛ばされた。

イーグル『これで死んだわね。』

イーグル（ソラ）「これなら・・・」

そして立ち退こうとしたその瞬間！！

サジタリウス（アルト）「ゲホッ、ゲホッ、へへっ、まだ勝負はついてねーぜ。」

イーグル（ソラ）「！！」
突然の声に驚き振り返るとすぐ目の前にサジタリウス・アローがいた。

イーグル（ソラ）「ど、どうして！？」
イーグル『今のも耐えたっていうの！？』
二人は驚愕の顔でサジタリウス・アローを見た。

サジタリウス（アルト）「ソラ・・・」

イーグル（ソラ）「どうして、立っているのもやっとのはずなのに！？」
イーグル（ソラ）「それになんで1度も反撃してこないのよ！？」
イーグル・フェザーがサジタリウス・アローを問い詰める。

サジタリウス（アルト）「俺は・・・お前を助けたいんだ！、ソラ俺はお前を助けるためだったらなんだってしてやるさ！」

イーグル（ソラ）「ッ！！・・・・」

サジタリウス（アルト）「ソラ、俺はお前を助けたいだから、教えてくれないかお前に何があったのかを・・・」

イーグル『ソラ、こんな奴に何を言っても意味ないわ！！』

イーグル（ソラ）「・・・・・・・・わかった・・・・話してあげるわたしが経験した・・・・・地獄を・・・・・」

そうしてソラは、ゆっくりと話し始める。

ソラを救え！、悲劇のヒロイン、イーグル・フェザー！！（後書き）

更新遅れてすいません。

明日も更新できるかちょっと危ういです・・・

本当にすいません・・・

それじゃあ次回予告します。

次回「ソラの過去」

お楽しみに。

ソラの過去

そして、アルトとイーグルが見守る中、ソラの過去が語られ始める。

ソラ「わたしのパパは、鷲尾グループっていう世界的に有名な大会社の若社長だったの・・・」

アルト「・・・ってことは、ソラって社長令嬢ってやつなのか？！」

ソラ「・・・そう・・だね・・・・・・」

アルトの問いかけにソラは、力なく答えた。

アルト「でも、たしかお前だったって言ったよな？、あれはどういう意味・・・？」

ソラ「・・・・・・死んじゃったの・・・・・・・ママと一緒に交通事故で・・・1ヶ月前・・・・・・

わたしだけ家でお手伝いさんたちと留守番してて助かったの・・・」

アルト「ッ！？、・・・・・・」

ソラの口から重々しく語られた言葉を聴き、アルトは自分の言葉に後悔を感じた・・・

アルト「・・・・・・ソラ・・・・・・」

ソラ「・・・・それからだよ
わたしの周りから人が消えていったのは、
友達だと思ってたみんなは、わたしからどんどん離れていったの・・・
先生も学校のみんなも
みんなわたしを哀れなものを見る目でみてたの・・・・
そしてね・・・
親がいないことを・・・からかわれはじめたの・・・」

アルト「ッ！？」

ソラ「いじめはどんどん酷くなっていってね、
わたしの周りに助けてくれる人なんていなくて・・・
・・・もうだれもいないの・・・
ねぇ、わたしがいったいなにをしたの！？

パパとママは、なんでわたしだけ残して死んじゃったの！？」

ソラは声を荒げ泣きながら叫んだ。

ソラ「もう・・・誰もわたしのことを思ってくれる人なんていない
よ・・・うううぅ・・・・
わたしは・・・一人なんだ・・・」

ソラは、アルトの目の前で泣きながら崩れおちた・　・　・

アルト「ソラ・・・」

イーグル『わかったかしら?、この子の負った心の傷はＦＭ星人であるこのわたしにしか直せないのよ！
そして、わたしたちはソラを一人にしたやつらに復讐しに行くのよ！！
』

イーグルは、強みのある声でアルトに向かって叫んだ

しかし、

アルト「そんなことねーよ！！」

イーグル『ッ！？』

アルトはイーグルに強くそう言って、泣いているソラに腰を落として優しく声をかける。

アルト「ソラ・・・」

ソラ「ううぅ・・・アルト・・・」

ソラは泣きながら顔を上げアルトを見る。

しかしすぐに顔を背け・・・

ソラ「アルトなんかにわたしの気持ちなんてわかんないよ！！」

・・・と強く言い放った。

しかし、アルトは優しく、

アルト「わかるさ、俺もお前と同じで両親を事故で亡くしてんだ。」

ソラ「えっ！！」

ソラはアルトの言葉に目を丸くして素っとん狂な声を上げた。

アルト「お前言ったよな、自分は一人だって、誰もお前のことを思ってないって、

でもな、今は俺やスバル、委員長だってソラ、お前のことを大切な友達だって思ってるぜ。」

ソラ「・・・わたしが・・・大切な友達・・・！？」

イーグル『嘘よ！！、ソラ騙されちゃだめよ！！』

イーグルが焦って止めようとするがアルトは話をやめない。

アルト「そうだよ。だからソラお前はひとりじゃない、
俺達のほかにだってお前のことを大切に思ってくれる人が絶対にもっといるはずだ！。」

アルトは、ソラの肩をつかみ呼びかけるように叫ぶ。

ソラ「ううぅ・・・ひっく・・・あるとぉ・・・うえええぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

ソラは大声で泣きながらアルトに抱きついた。

そして、アルトはソラを優しく抱きしめて言う、

アルト「これからは俺達がずっといっしょにいてやる、お前をもうけっして一人になんかしない。

・・・ぜったい、俺が　守るから・・・」

イーグル『まちなさい！ＦＭ王の地球抹殺命令を実行しないとわたしも星に帰れないのよ！！』

イーグルが叫ぶとそこにサジタリウスが出てきていった。

サジタリウス『おい、イーグル、その命令１年まえに撤回されたぞ。』

しばしの沈黙・・・

イーグル『え？』

イーグルがまの抜けた声で言う。

サジタリウス『だから、命令撤回されたんだってば！・・・まさかお前知らなかったのか！？』

イーグル『え！？、ちょっとまって。』

するとイーグルは、どこからか無線機のようなものを取り出す。

ピー　ピー　ピー　　ガチャン

イーグル『あ、もしもし、オリオン長官ですか！？、イーグルですが！』

オリオン『おお、イーグルか！、久しぶりじゃのう、ようやく連絡がついたわい。』

無線から嬉しそうな老人の声が聴こえてきた。

オリオン『しかしここ1年半ほど連絡がこちらからできんかったのじゃがなにかあったのか？』

イーグル『はい、1年半前地球攻撃軍からはぐれ、そして電波ウイルスの攻撃で無線機の調子がおかしくなり
連絡を受けるのができませんでした。』

オリオン・サジタリウス『『アホかぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー!!』』

オリオンとサジタリウスからナイスなツッコミがはいった。

イーグル『ひいい、も、申し訳ございません!それでFM王が地球攻撃命令を撤回されたとかで、』

オリオン『うむ、そして王は現在地球との友好的な関係を築かれるとともにAMプラネットの復興に
お力をそそがれておるのじゃ。』

イーグル『そうですか・・・じゃあ、その、わたしもこの地球にい

てもいいでしょうか？
わたし、この地球を気に入りました。
それにわたしのせいで人間の少女に多大な迷惑をかけてしまい、
そのことをはっきりさせないことにはＦＭ星には帰れません！』《
それに道もわかんないし》↑方向音痴

オリオン『うむ、・・・わかった王にはわしからお伝えしておこう。
』

イーグル『ありがとうございます！』

オリオン『うむ、達者での。』

プツッ、ツーツー・・・

サジタリウス『イーグル、お前もこの星が気に入ったのか？』

イーグル『ええ、でもまずはソラに何をしてでも謝らなくちゃいけ
ないわ・・・』

サジタリウス『どうやらお前がソラを助けたかったって気持ちもま
んざら嘘じゃなさそうだな。』

そして、二人は少し離れたところにいるアルトたちの元にむかってウェーブロードを駆けていった。

そして、ソラとアルトはサジタリウスたちと合流する。

～旅館〈うらかわ〉玄関前～

（現実世界）

ソラ「本当・・・なんだね・・・イーグル・・・」

ソラが険しい表情で目の前のイーグルに言う。

イーグル『ええ、わたしはあなたの体を使って地球を侵略しようとしたわ

さあ、煮るなり焼くなりあなたの好きにして頂戴。』

イーグルは両手を上げ抵抗の意思がないことを示した。

ソラ「アルト・・・」

ソラは不安そうにアルトを見つめた。

アルトは、ふっと笑い、

アルト「お前の思うようにすればいいさ」

と微笑む。

その微笑にソラは決めたように、

ソラ「じゃあさイーグル、わたしのウィザードになってくれない？」

と、笑顔でイーグルにたずねた。

イーグルは、初めわからないという顔をしていたがしだいに笑顔になり、

イーグル『ええ。喜んで！』

と、微笑んで返した。

アルト「よかったじゃねーか、ソラまた大切な友達が増えてさ♪」

アルトが言うとソラが振り返って、

ソラ「うん♪」

と、嬉しそうに微笑んだ。

ソラの過去（後書き）

スバル「・・・・・」

ウォーロック『・・・・』

あれ？どうしたの二人とも？

スバル「どうしたのじゃないよ！」

ウォーロック『俺達途中から出番全然ねーじゃねーか！』

だ、大丈夫だよ、この章実はまだ終わりじゃないんだ。

「『え？』」

だから、このあとのきみたちの活躍に期待しててよ、ね、ね。

スバル「あやしいけど・・・」

ウォーロック『出番くれるなら・・・』

「『いっか♪』」

（ふー、助かった。）

それじゃあスバル君、次回予告やっちゃって！！

スバル「は～い、それじゃあ次回「りょかんにて・・・」それじゃあ次回も、」

「「『よろしくお願いしまーす！』」」

りょかんにて・・・（前書き）

アルト「・・・・・というわけだ。」

アルトはハンターに映るスバル達にいままでのことを説明した。

スバル「・・・そうなんだ、そらちゃんにそんな過去が・・・」

ツカサ「そういえばジェミニ、イーグルってどんな奴なの？」

ジェミニ『地球侵略軍1の方向音痴だ。』

ツカサ「・・・そう・・なんだ・・・（苦笑）」

アルト「そんじゃあ、詳しいこと話すから中央広場で待っててくれ。」

「「「「「「「「「わかった（あいよ）（おう！）！」」」」」」」」」

そして、通信が切れた。

りょかんにて・・・

旅館〈うらかわ〉

通信を終えたアルト達は、動物園に戻るため電波変換した。

アルト「トランスコード　０１６　サジタリウス・アロー！！」

ソラ「電波変換！　鷲尾ソラ　オン・エア！！」

二人が電波変換すると、そこにはさっきの戦いの傷が残るサジタリウス・アローと
それを心配するイーグル・フェザーがいた。

ハンターＶＧ《サテラポリスに登録完了　　トランスコード２５
イーグル・フェザー》

イーグル（ソラ）「え？、なにこれ！？」

ソラが驚いていると、アルトが説明する。

サジタリウス（アルト）「これはトランスコードだな。ソラ、今度から電波変換する時はこいつを使うんだ。」

イーグル（ソラ）「そういえばアルト、ケガ大丈夫？」

サジタリウス（アルト）「よゆー、よゆー、応急処置はしたし、薬も付けた、今日安静にしてりゃあ明日には治るさ！」

イーグル（ソラ）「そう・・・良かった。」

イーグル・フェザーは、ホッと胸をなでおろした。

サジタリウス『さあ、いこうぜ』

二人は、光となってウェーブロードを駆け抜け、途中でアルトのおごりでベビーカステラを買い、
動物園の中央広場近くのしげみで電波変換をといた。
そして、中央広場のベンチにかたまっているスバル達のほうに駆けていった。

中央広場ベンチ

スバル達はアルトに呼び出され集まっていた。
ちなみにゴン太は２０袋ものアニマルベビーカステラをほおばっていた。
ミソラとソプラもゴン太からもらったのか、二人仲良く食べていた。

スバル「あ、アルトく～ん！、こっち、こっち！！」
スバルが走ってくるアルトとソラをみつけ手を振る。

アルト「おう、またせたな！」

ソラ「みんな、迷惑かけてごめんね。」
イーグル『はじめましてね、イーグルです。よろしく。』

ソラが謝り、イーグルが挨拶した。

アルト「それじゃあ、話すぜ。」

～色々と詳しく説明中～

・・・・とっ、まあこんなもんかな」

ルナ「そうだったの、ソラちゃんあなたも悲しい思いをしたのね。」

ソラ「うん・・・」

ルナ「でも、もうあなたは一人じゃないわ！、これからコダマ小学校で困ったことがあったら
わたしたちに相談してね。」

ミソラ「ここにいるみんなソラちゃんのことたいせつに思ってるからね。」

ソラ「・・ぐすっ、うん、ありがとうみんな。」

スバル「それじゃあ日も傾いてきたし旅館(うらかわ)に戻ろう。」

見上げると夕陽が東の空をあかね色に染めていた。

旅館〈うらかわ〉

ロビー

アルト「・・・ちょっとまて、なんでおれがロビーで寝るんだよォォォォォォーーーーーーー！！！！」

アルトが絶叫した。

ソプラ「当たり前じゃない！、アルトがわたしと同じ部屋でなるなんてそんなのたえらんないわ！」

スバル「二人とも落ち着いて（焦）」

ゴン太「がつがつ、（カステラうめぇ～）」

ソラ「アルト、ほかの人に迷惑だよ！」

今起こっていることを説明すると・・・

1、ソラも同じ旅館に泊まっていたことが判明

2、アルトとソプラが同じ部屋になっていた（朝の話参照）

3、ソプラがアルトと一緒の部屋はいやだと駄々をこねる。

4、なんだかんだでアルトがロビーで寝ることに←いまここ

アルト「だから！、どうして俺がロビーのいすで寝なきゃいけねえんだよ！」

ツカサ「だから落ち着きなって！」

ルナ「ギャーギャー騒ぐんじゃないわよ決まったんだからしかたないでしょ！これは命令よ！！」

キザマロ「アルト君、これ以上委員長を怒らせないでください（こっちが被害を受けるんですから）」

ジャック「うるせえぞ、ドリル女！」

アルト「だからってなあ・・・・

ソラ「じゃあアルトわたしの部屋で一緒に寝よ♪」

「「「「「「「「「「「「「え！？」」」」」」」」」」」」」

アルト「・・・ごめんソラ今なんていった？」

ソラ「わたしのへやで一緒に寝よ♪」

アルト「えええええええぇぇぇぇぇぇぇーーーーーー！！！！！！！！！！」

ミソラ（ねぇ、スバル君ソラちゃんってもしかしてアルト君のこと・・・）

スバル（多分、そうだと思うよ）

その後アルトは無事ソラと同じ鷲の間に宿泊することとなったのでした♪

アルト「無事じゃねーーーーーーーー！！！」

ルナ（そうだ！いいこと思いついたわ、みんながお風呂から揚がったらふふふ・・・）

なにかをたくらんでいる委員長でした。

りょかんにて・・・（後書き）

次回は、スバル君が苦手そうなあれをやりたいと思います。

スバル「僕が苦手なものって・・・・まさか！」

次回「旅行の夜は・・・」向後期待くださいまし！！

スバル「いやだぁぁぁぁぁーーーー！！！」

旅行のよるは・・・

午後７：３０分

鷲の間

畳がひきつめられ、窓は障子が張られており

旅館でよく見かける有料のブラウン管テレビがある和室に

風呂から揚がったアルトは寝転んでソラを待っていた。

アルト「ソラの奴おせーなー、もう俺があがって２０分はたつぜ。」

イーグル『アルト、いい？女の子はお風呂が長いものなのよ！」

サジタリウス『そんなもんかねぇ』

イーグル『そんなもんよ！』

アルト「けどはやくいかねーと委員長怒るぜ」

その理由は数時間前にさかのぼる。

ルナ「みんな！！、今夜お風呂を揚がったら全員旅館の外に集合よ！」

ルナがロビーから部屋に戻ろうとしていたスバル達に声をかけた。

スバル「え？、委員長まさかなにかするの？（苦笑）」

代表してスバルがたずねるとルナは当然という顔をして。

ルナ「ふっふっふ、それは・　・　・　肝試しよ！！！」

ルナが腕をつきあげて高らかに宣言した。

「「「「「「えええええぇぇぇぇぇ～～～～！？」」」」」」

数人がいやな顔をした（とくにスバル）

それを見てルナは「拒否権はないわよ」と脅した。（笑）

かくしてスバル達は（強引に）肝試し大会に参加させられたのであった。

１７：４５

旅館前

輝く星空の元１０人の少年少女が今肝試し大会に参加すべく集まった。

スバル「いやだなぁ～」

スバルは、暗い顔をして下を向いていた。

ミソラ「スバル君！、大丈夫だよ。わたしとスバル君がペアを組んだら怖さなんて忘れちゃうって♪」

スバル「ミソラちゃん・・・うん！そうだね！！」

こいびt・・・ミソラの笑顔に影響されてかスバルもなんとか参加することを決めたらしい。

そんな中ルナがルールせつめいを始める

ルナ「いいみんな？ルールは簡単よ。
この中で二人1組でペアを組んでこの森の奥にあるお寺の祭壇においてあるお札をもってくるだけよ
ちなみにゴン太、キザマロ、あんたたちは脅かし役につきなさい！」

「「は、はいいいいっ！！！、」」

キザマロ「行きますよ、ゴン太君！」

ゴン太「お、おう！」

二人はダッシュで準備に取り掛かった

ルナ「それじゃあ、ペアだけど・・・しょうがないわね、1組目はスバル君とミソラちゃんでいいわ」

ルナが、仕方がないという言い方で言ったしかし殺気は十分飛ばしている。

スバル「う、うん分かったよ（委員長絶対殺気立ってるよ）！！」

ミソラ「わーい、スバル君と一緒だー！」

ハープ『よかったわね、ミソラ！』

ウォーロック『あん？、なにがよかったんだ？』

ハープ『黙りなさい、このＫＹ星人！』

ウォーロック『うるせー！！おおきなおせわだ！！』

2体のウィザードが喧嘩を始めたが

オペレーターたちはいつものことという様子で見ていた。

ルナ「えーい、このさい面倒だわ！昼間の組み合わせで行くわよ！！」

そして、この夜中の恐怖行事は、

Aペア、スバル&ミソラ

Bペア、ルナ&ジャック

Cペア、ツカサ&ソプラ

Dペア、アルト&ソラ

となった。

そして、Ａペアのスバルとミソラが今トップバッターとして

お寺に続く暗い森の小道を歩いていた。

ふくろうの声や虫のさざめき、がこの怖い雰囲気をさらに沸き立たせる。

そんな中スバルとミソラはミソラのお願いで手をつないでいた

スバルの心臓はいろんな意味でどきどきしていまにも止まりそうである。

スバル「ううう、やっぱり怖いな・・・」

スバルが身震いしながら言うとミソラが、

ミソラ「大丈夫、大丈夫♪脅かし役だってゴン太君とキザマロくんでしょ？」

スバル「そうだけど・・・」

そういいながら歩いていると少し霧が出てきたしかし視界を失うほどでもない。

すると、いきなり霧の中でなにか赤いものが光りながら宙を浮いていた

スバル「で、で、でたあああぁぁぁぁぁぁぁアァ！！！」

スバルは、もうダッシュでお寺へ走っていった・・・

ミソラ「あ、ちょっとまってよスバルく～ん！」

そう叫びながらミソラはスバルを追いかけお寺に向かった。

そのあと満足そうに話し合う彼らがいた。

ゴン太「オックス。ご苦労だったな。」

オックス『ブロロロロロ、火の玉ぐらいいくらでも造れるぜ！』

キザマロ「ペディアのアイデアのドライアイスの霧も効いてましたよ！」

ペディア『えへへへ、さぁキザマロ君あとのみんなも脅かしちゃおう！』

ルナ「きゃあああ！！」

ジャック「うおわああ！！」

ツカサ「おっと！」

ソプラ「キャッホー！♪」

次々とB、Cペアを驚かせていった。（ツカサはリアクションが小さくソプラははしゃいでいたが・・・）

そしていよいよアルトとソラのペアの番が来た。

旅行のよるは・・・（後書き）

キザマロ「どうも、こんにちは最小院キザマロです。」

S・Sです。

とにかくまずは最近更新遅れ気味で申し訳ありません！

キザマロ「そのぶん、僕たちががんばりますのでどうか読み続けてください。」

それじゃあ次回予告！キザマロ君よろしく！！

キザマロ「はい！、次回は「俺が、絶対守る」です！それではみなさん！」

「「次回もお楽しみにー！」

俺が、絶対守る（前書き）

アルトとソラ

今日、二人は出会い、そして衝突し、そして大切な友達となった

その夜、肝試しでペアとなった二人は・・・・・・

俺が、絶対守る

～森の入り口～

そこにはスバル達がかなり衰弱した様子で座り込んでいた

そしてその様子はこれからいくアルトとソラのペアを不安へと導いた。

アルト「・・・おい、スバル・・・」

スバル「ふぇ～、な、なに?・・・・」

アルトの言葉にスバルはぐったりとした表情を浮かべた

その顔からこの先に何があるのかがおおよそ伝わってきた

アルト「・・・・・・いや、やっぱなんでもない・・・休んででくれ・・・」

アルトとソラはお互いの顔をみながらため息をついた。

「「はぁ～」」

ルナ「ちょっと！、あなたたちでラストなんだから早く行きなさいよ！！」

そんな中、委員長だけは元気にふたりをまくし立てる。

アルト「はぁ～、わかったよ、さ、いこうぜソラ。」

ソラ「う、うん・・・」

そして、二人はお寺に続く暗い森の小道へ歩いていった。

～小道～

二人は不気味な雰囲気の夜の森を進んでいる
5月ならではの妙な涼しさがアルトとソラに妙な緊張を与えていた

ソラ「ねえ、アルトお寺ってまだかな？」
ソラが怖さをまぎらわすため、アルトに話しかけた。
ちなみに怖さのためか、無意識に上目づかいになり
アルトからすればものすごくかわいいと、言えるだろう

アルト「え、え～ともうすぐなんじゃないかな／／／」

ソラ「そっか・・・」

そしてそのまま歩きつづけると・・・

モワ〜〜、

ソラ「きゃっ、なに？これ！」

アルト「霧か？」

突然二人の周りにしろい霧が広がった（ドライアイスの）

アルト「！？ッ、結構濃いな、３メートル先が見えねえ」

ソラ「うう、アルト・・・怖い・・・」

そういってソラはアルトの手を握った

アルト「え、ソ、ソラ！？／／／／」

アルトは顔を赤く染めるがふと

目の前の霧の一部が赤く光ってる事に気がついた。

アルト「・・・ソラ・・・あれ・・・」

アルトは若干顔を青ざめながらにぎられていない方の腕で赤く輝く霧を指差す。

ソラ「・・・え？、なに？、あれ？」

ソラがさす方向を向いた瞬間、

赤い光は霧から飛び出してきた

「「！？ッ、！！」」

その赤い光の正体は赤く燃える１０ｃｍほどの火の玉だった・・・

そして、その火の玉は二人の周囲をグルグルとゆっくり周りだした。

ソラ「きゃあああああぁぁぁぁ！！！！、お化けぇぇぇぇーーーーーーーー！！！！」

ソラは、小道をはずれ森のなかに走っていった。

アルト「お、おい！まてよソラーーーー！！」

アルトもソラを追って森の中に走っていった

キザマロ「あの～、ゴン太君僕たちどうすれば・・・」

ゴン太「ほっときゃあそのうち帰ってくるんじゃねえか？」

オックス『にしても、ちょっと脅かしすぎたか？』

ペディア『！！ッ、た、たいへんだよ！この森すごく入り組んでいて迷うと出てこれないらしいよ！』

脅かすためこの森の地形を調べていたペディアがキザマロたちに報告する、

「「『な、なんだって～！？』」」

キザマロ「た、大変です！すぐに委員長たちに知らせなければ！」

ゴン太「お、おう！」

そして二人と2体は森の入り口に走っていった。

～森の奥の泉～

月の明りが泉の水面に反射して輝くここでは

怖くて逃げ出したソラとそのソラを追いかけてきたアルトが泉の辺にふたり並んで座っている

アルト「ソラ、お前意外と怖がりだったんだな」

ソラ「いいじゃん、別に・・・」

アルトの言葉にソラは少し膨れて答える

しばしの沈黙

ソラ（あ～あ、アルトのまえでお化け嫌いがばれるなんて・・・嫌われたかな・・・）

アルト（やばいな、ちょっと気まずいな、それより今のソラの顔めちゃくちゃかわいかったな／／／）

間逆のことを考えてる二人・・・

そんななか一人のＫＹが沈黙を破る

サジタリウス『おい！アルトお前今が絶好のチャンスじゃねーか！ソラの事が好きなら今ここで言ってやれよ！！』

サジタリウスがしびれを切らしたように叫びアルトの気持ちを暴露してしまった

こんな時アルトにとって空気が読めないパートナーほど残酷な奴はいないだろう

ソラ「え！、てことはアルトって！！／／／／／／／／／／／／／」

アルト「ちょ、バカ！サジタリウス！／／／／／／／／／／／／／／」

二人の顔は見る見る赤く染まっていった

サジタリウス『ん?、なんだお前ソラと一緒にいるときやけに顔赤かったし・・・違うのか?』

アルト「いや、違ってないけどさ／／／／／／／」

思わぬ形で自分の気持ちがソラに伝わってしまったことを焦るアルトはソラの方を向いた

ソラは顔を赤くしてうつむいている

しかし腕は拳をつくり、ガッツポーズしているようにみえた

彼の後ろでイーグルがサジタリウスにＫＹさを説教している

アルト「え、え～とこれは／／／／」

アルトがソラにいいわけをしようと話し始めると

そのことばをさえぎるように

ソラ「・・き・・よ・・／／／／」

アルト「え！！」

ソラが消えそうなぐらい小さな声でささやいた

ソラ「す・・だよ・・／／／／／」

再びソラがささやき赤くなった顔を上げる

ソラ「好きだよ、わたし、アルトのこと／／／／／／／／／」

アルト「・・・ソラ・・・」

ソラ「アルトが昼間助けてくれなきゃわたし木箱の下敷きになってたし、
アルトが私の事大切な友達だっていってくれなきゃわたしみんなを傷つけてたし
イーグルとも友達になれなかった、
そして何よりアルトがわたしのことを心の底から思ってくれなかったら、
パパとママのことも乗り越えられなかったと思うの
だから、その、わたしはアルトのことが大好き！」

ソラがアルトに微笑んで言った、
そしてアルトは今の自分の気持ちを正直に言った

アルト「俺も、ソラのことが大好きだ
ソラ、俺と付き合ってくれないか？」

そしてその答えを聞いたソラの微笑みは満天の笑顔になり
ソラ「よろこんで！！」
と、言ってアルトにだきついた

そしてアルトは、
アルト「もう、お前を絶対に一人にさせない
俺が、絶対に守る！」
そう、力強く誓いソラを抱きしめた

～森の入り口～

アルトたちの帰りを待っているスバル達９人は現在キザマロ達の話を聞いていた

キザマロ「～～～～～～～というわけなんです」

スバル「た、大変だ急いで二人を探しに行こう！」

ジャック「おお！、急ごうぜ！」

アルト「じゃあ、電波変換できる奴らは空から
できない奴らは地上から俺たち9人で二人を見つけるんだ！」

ルナ「わかったわ、それじゃあアルト君の案で・・・アルト君！？」

ルナたちが気がついたその時にはアルトはいなかった

ツカサ「ええ！？、今アルト君の声したよね？」

スバル「うん、でもアルト君は今森の中にいるはずじゃあ・・・」

ミソラ「それじゃあ、さっきのアルト君は・・・」

全員の顔から血の気が引いていく

ジャック「まさか・・・な・・・」

ツカサ「そういえばさっきまで9人いたよね？」

ツカサの言葉に全員が顔を見合わせる

ミソラ「・・・8人・・・だよ・・・」

さらに彼らから血の気が引いていった・・・

俺が、絶対守る（後書き）

と、いうわけで最後にちょっと遊んでみました

ちなみに9人目はアルト君じゃないですよ

そう、あれですよ・・・

では、次回「アルトの寝起きドッキリ大作戦！！」お楽しみに

アルトの寝起きドッキリ大作戦！！（前書き）

なぜ、この話を書いたんだろうか・・・

アルトの寝起きドッキリ大作戦！！

鷲の間

早朝５時

アルトとソラは今、この部屋で二人仲良く眠っていた（ちゃんと別々の布団で）

ちなみに昨日の夜は電波変換して帰ってきた

その後スバル達の話を聞きソラが悲鳴を上げたのはいうまでもないだろう

そして今、朝日が少し差し込んだこの部屋にけたたましい目覚まし時計の音が鳴り響く

ピピピピピピピピッ！！！

そして、二人は目を覚ます

アルト「う～ん・・・朝か・・・」

ソラ「ふわぁ～～・・・おはよ～アルト～」

二人は目をさすりながら起き上がるとなにやらごそごそと荷物をあさりだした

そこに、ガラッっと鷲の間の襖を開けて浴衣姿のソプラが入ってきた。

ソプラ「おっはよ～♪、カップルさん♪」

アルト「おお、おはよソプラ、カメラとマイク持ってきたか？」

ソラ「おはよ、ソプラちゃん」

二人は振り向き確認をする

どうやらこの三人はなにかを企んでいるらしい

ソプラ「バッチリ、カメラとレポーター用マイク持ってきたよ～♪」

そういいながらソプラはどこかのテレビ局が使うようなカメラとマイクを取り出した

ソラ「すご～い、よくできてるね～」

そういいながらソラはソプラの持ってきたカメラとマイクを手に取る

アルト「にしてもこれ、リアルウェーブだろさすがだなお前」

アルトはカメラをまじまじと見つめながらつぶやく

それにソプラは

ソプラ「まあね♪わたしかかればこんなの余裕よ、
それよりアルト、ドッキリの道具準備できた？」

アルト「おう！、これをみな！！」

そういってアルトは荷物の中から「かんしゃく玉」、「風船」、「

早朝バズーカ」を取り出した

ソプラ「ちょっとアルト！何であんたが早朝バズーカ持ってるのよ！」

ソプラがアルトに鋭いツッコミを入れた

それにアルトは

アルト「え？、作った（笑）」

虎の間前廊下

現在アルトがカメラを構えてソプラがドッキリ道具を持ち、そしてソラがマイクを握っている

そして、カメラを構えたアルトがしのび声で話した

アルト「いいか、今からカメラ回すけど本番は1回勝負だ二人ともしくじるなよ」

アルトが念を押すように言うとソラとソプラもしのび声で

ソラ「まかせてよわたしが完璧にこの「みんなの旅行の思い出に寝起きドッキリやっちゃおう大作戦！」をレポートするから♪」

ソプラ「ふっふっふ、そしてわたしがスバル君とミソラちゃんの枕元にかんしゃく玉を・・・（にやり）」

アルト「よし、そんじゃあ撮影・・・スタート！」

そしてカメラが回る、

ソラはマイクをもってしゃべりだす

ソラ「は～い、どうもソラで～す。

今の時間午前５時１５分で～す

え～とですね今からわたしはアルトとソプラちゃんと一緒にみんなに寝起きドッキリをしかけたいと思いま～す

それでは今から、スバル君とミソラちゃんが寝ている〈虎の間〉におじゃましたいと思いま～す」

そういいながらソラたちは虎の間の扉を音なく開け中に入る

アルト（よし、いいぞバッチリだ）

ソプラ（ソラちゃん結構上手だね～♪）

ソラ「はい、おはようございま～す」

ソラはおきまりの台詞を言いながら部屋に入る

虎の間の構造は鷲の間と同じで唯一違うところはスバルとミソラが同じ布団に寝ているところだ

ちなみに二人が寝ている布団の横に無造作に抜け出した跡のある布団があるため

おそらく夜中ミソラがスバルの布団に潜り込んだということだろう

そこまで3人が推理したあとソラがレポートを再開した

ソラ「はい、お二人とも幸せそうに眠っておりますそれではソプラちゃんお願いします」

そういいながらソラは少しスバル達から離れかわりにソプラが近づく

アルトは一番リアクションがよく撮れる位置に移動した

そしてソプラがかんしゃく玉をスバル達の枕元に投げた

ソプラ「そ～れ、ポーイ♪」

パーン！、パーン！、パパーン！

大量のかんしゃく玉が二人の枕元で踊るように弾け大きな音を立てた

スバル「うわ！！、なになに！？、ふえ！？ミソラちゃん！！！」

ミソラ「うにゃ～、スバル君・・・むにゃ、むにゃ・・・あれ？、なに？」

スバルは飛び起きてナイスとしかいいようのないリアクションを取ったが、

ミソラは寝ぼけてまだスバルに抱きついていた

その結果をソラはカメラ（アルト）に向かって

ソラ「はい！、というわけでスバル君のリアクションが予想以上に

面白くって
ミソラちゃんは大好きなスバル君にずっと抱きついていました～」

スバル「なに！？アルト君たちなにやってるの！？」

ソプラ「ねえ、ねえ、スバル君まだ内容理解してないみたいだよ、ミソラちゃんまだ寝ぼけてるし（笑）」

アルト「とりあえずミソラちゃんはあとで起こすとしてスバル！」

スバル「ふぇ？、いったいなに？」

スバルは気の抜けた返事をした

アルト「実はこの企画は俺とソラとソプラで考えて・・・・・・・・・・というわけだわかったか？」

スバル「う～ん、なんとなく・・・」

ソプラ「それじゃあわたし達はツカサ君とジャック君のいる火鳥の間にドッキリやりにいくから

二人仲良く二度寝してなよ♪」

ソラ「撮ったのは、今度上映会を開くからみんなでみようね♪」

サジタリウス『そんじゃあ、おやすみ～』

そういってサジタリウスは虎の間に戻ろうとした

イーグル『ちょっと！、なんでもどるのよ！、ほらいくわよ』

サジタリウス『やだ～、眠い～～』

そういいながらサジタリウスは火鳥の間に連行されていった・・・

スバル「・・・僕、放置なんだ・・・」

むなしくなって二度寝したスバルであった・・・

火鳥の間前廊下

ソプラ「はいは～い、今回のツカサ君、ジャック君のドッキリはこのわたしソプラちゃんが担当しまーす♪
それじゃあさっそくおじゃましたいと思いま～す♪」

アルト「よし、そんじゃあソラ風船準備は？」

ソラ「バッチリ！、大きく膨らんでるよ」

アルトの問いにソラは親指をたてて答える

ガラッ、

ソプラがこっそりとお決まりの台詞をいいながら部屋に入る

ソプラ「おはようございまー・・・・・」　「「おはよう（おお、おはよー）」」

3人の視界にとんでもないものがあらわれ、思わず声を漏らす

「「「ええ！？」」」

なんと、そこにはツカサとジャックが入り口近くの洗面台で顔を洗っていたのだ

そして、三人は顔を見合わせ

「「「・　・　・　・　おじゃましました～！」」」

火鳥の間を去った・・・

ツカサ「え！？ちょっと！」

ジャック「あいつら、朝っぱらからなにしに来たんだ？」

コーヴァス『おれは、しらね～ぜぃ』

ジェミニ『上に同じく』

ヒカル『ぐか～、ぐか～・・・』

竜の間前廊下

委員長のいる竜の間の前では現在アルトたちの作戦会議が行われたいた

アルト「いいか、部屋に入ったらすぐ俺が布団で寝ている委員長の真上に〈早朝バズーカ〉を打つから
リアクション撮ったら電波変換して急いで逃げるんだ」

ソプラ「ルナちゃん怒ると怖いもんね」

ソラ「じゃあレポートは無しで」

アルト「よし、行くぞ！

ソラ、イーグル、サジタリウス、電波変換（逃走）準備！」

「『『いいよ（Ｏｋ！）』』」

アルト「ソプラ、カメラ準備！」

ソプラ「完璧だよ♪」

アルト「よし、じゃあ、開けるぞ・・・」

アルトが扉を開けるすると扉は音もなく開いた

そして、こっそりと中に入り

アルトは、バズーカを構える

アルト「3・・2・・・1・・・発射！」

ドオオオンッ！！

大きな音を立てて白い煙と共に早朝バズーカが発射された

そしてそれは寝ているルナの真上を通過する

ルナ「きゃああぁぁ！！、なに！？、あ、熱！！！」

ルナは突然の出来事に驚いて悲鳴を上げ床をのたうちまわる

ソプラ「OK♪、バッチリとれたよ。」

ソラ「逃げるよ！、ソプラちゃん捕まって」

ソプラ「うん！」

ソプラはソラの腕を掴んだ

アルト「よし、退散だ！！」

トランスコード０１６　サジタリウス・アロー

トランスコード０２５　イーグル・フェザー

二人は電波変換した

サジタリウス（アルト）「いくぜ！」

３人は鷲の間に退却した

そして、バズーカの煙が収まった竜の間

ルナ「まったく、誰よこんなことしたのは!、スバル君?、アルト君?」

モード《ここは皆さんの安全のため真実は伏せておきましょう》

ルナ「キイイイィィィィィッッ!!!!!!」

ルナが怒り狂っていた・・・

鷲の間

アルト「・・・あ！、ゴン太とキザマロ撮るの忘れてた・・・」

「「『『あ！！』』」」

ゴン太&キザマロ・・・ドンマイ・・

アルトの寝起きドッキリ大作戦！！（後書き）

とりあえず、更新遅れてすいませんでした。

さて、次回はついにあいつらが動き出しますよ

次回「アニマル大パニック！！、動物園の悪夢再び！？」

？『ガルルッ、ロックマン・エグゼ・・・２００年前の英雄・・・』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9542x/

流星のロックマン　時の果てのキズナ

2011年12月26日00時46分発行